

# 演 藝 薈 萃

昭和九年十月廿五日 第三種郵便物  
昭和九年十一月一日發行 每月一回  
「演藝薈萃」第九十八號 第九年十一月號



故 仁 左 衛 門 特 輯  
第 九 年 第 十 一 月 號

錠口生衛

# ルーカ

劑菌殺中口

ぎ防を病入りよ口  
るすに快爽を神精

當籤品拾余萬點

簡單で：  
面白い：  
當りの多い

## 大懸賞

### 懸賞課題

有名な懐中護身薬の名は何か？

衛生錠 ○ ○ ○ ○ ○

答案用紙はカオールの効能書の餘白へハッキリとお書き下さい。答案は封書として四角毎に三錢切手をはつて左記へ御送り下さい。

入て何枚でも出せませす皆様の御便利の爲各地のカール販賣店で答案のお取りつぎを致して居ります

- 一、答 ○ ○ ○ ○ ○
- 二、壹、貳等賞品の内お望みの品 點づつ
- 三、御覽になつた雜誌名
- 四、あなたの御住所 氏名

切 昭和九年十一月末日  
發表 昭和十年 月下旬

壹等 三十名  
貳等 五十名

- 本銘仙夜具 一組宛
- 總桐三ツ重箆筒 一棹宛
- 高級ラヂオセット 一臺宛
- ペビーパール 一個宛
- 寫眞機 一個宛
- 高級双眼鏡 一個宛
- 本銘仙座蒲團 一組宛
- 銀象嵌立徳火鉢 一對宛
- 本皮旅行鞆 一個宛
- 大型手提金庫 一個宛
- クローム側腕時計 一個宛
- 三等四等五等六等拾萬餘

答案の送り先

東京市日本橋區水天宮前

安藤井筒堂藥品部

懸賞係

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

# 喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

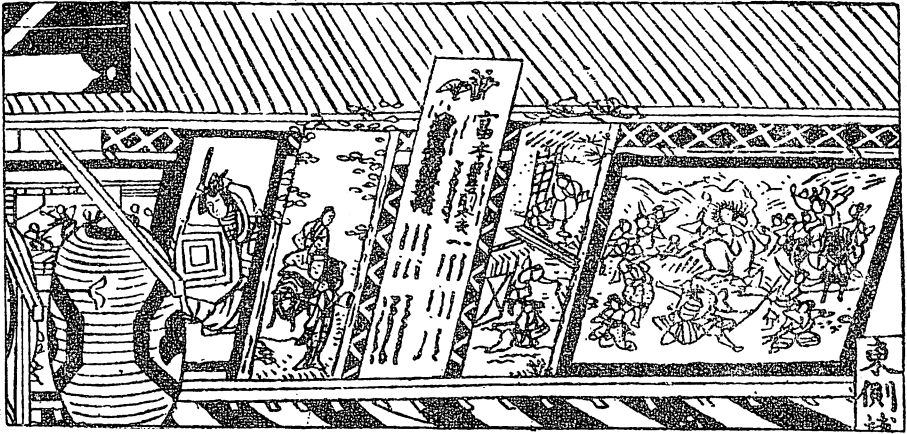
御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

支店

大阪支店 心齋橋筋八幡筋角  
北新地裏町  
京都支店 木屋町ドングリ橋





東側

◆道頓堀・昭和九年十一月號・第九十八輯◆

★口★

★繪★

★表  
★扉

歌舞伎座◎各派大合同劇・晝の部「水車の唄」しうかの樂士橋本。八重子の百合子「福澤諭吉」舞臺面「鎌」伊井の土音・嘉久子の妻・小大夫の兄・雪子の妹・越後獅子小大夫の男獅子。しうかの男獅子。八重子の女獅子。水車の唄。八重子の百合子しうかの樂士・夜の部「お夏狂亂」八重子の狂女お夏。小大夫の馬士。入斬り以藏。壽三郎の岡田以藏。八重子の妹百世。舞臺面。月よりの使者。八重子の野々口遣子。壽三郎の院長淺木博士伊井の村長。しうかの内村。水谷の道子。田之助の弘田進。◎新國劇・國定忠治「辰巳の國定忠治」波止場の朝久松の密輸おあい。島田の慎吉高田屋嘉兵衛長島のおゆき。辰巳の高田屋嘉兵衛二葉のおしも。浪花座◎前進座・天保六花撰「芳三郎の三千歳」菊之阪の直次郎。宗俊。牛を喰ふ。山岸のおよれ。長十郎のゴツク。鶴藏の伊勢屋。航右衛門の彌之助。國太郎の遊女おしも。◎角座◎新派劇「白粉花」梅野井の藝妓お舟。瀧の藝妓小りん。入選「山村の梅原」瀧の小夜子。中田の吉澤。小判て五千兩。都築の無宿の清藏。海野井の太七女房。山口の目新し新吉。河合の亭主太七。◎大阪劇場「秋のおどり」舞臺面

紙……………水谷八重子（大阪歌舞伎座）  
阪東壽三郎の福澤諭吉同

上演狂言

に就いて

八重子とお夏狂亂……………坪内逍遙（三）  
「鎌」のこと……………岡本綺堂（三）  
天保六花撰に就いて……………平田謙三郎（四）

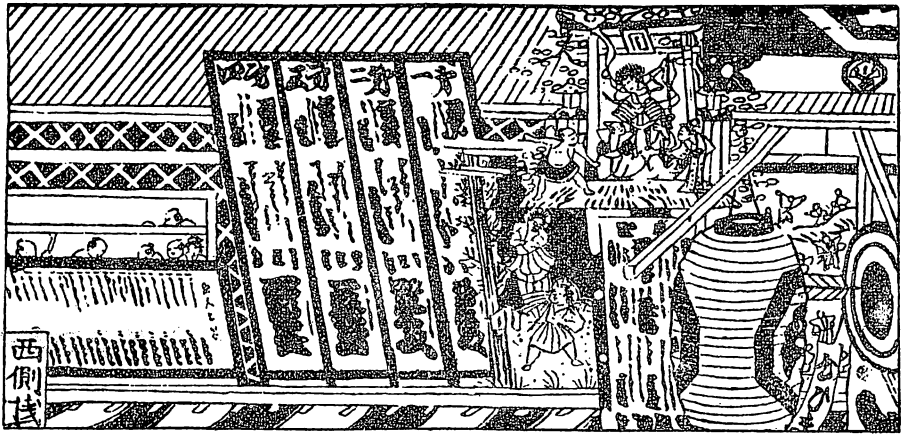
「鎌」見たま……………（六）「水車の唄」脚本拔萃……………（七）

ありふれ隨筆……………大橋孝一郎（八）

ヂグ・ザグ・樂屋訪問（一）……………（一）

辰己柳太郎の巻……………文・村上勝……………繪・妹春平三……………（三）

十月特刊  
皮肉だつた仁左衛門……………食満南北（七）  
仁左斷想……………西尾福三郎（三〇）  
略歴・當り藝・寫眞その他



芝居の手引(3).....山川 聽雨(三)  
 花柳情話「旅の女」.....都築文男(三)  
 賢外集(下).....大橋孝一郎(四)

軟扇子問帳交.....竿竹珍阿彌(二六)

水谷八重子の藝と人氣.....菱田正男(三〇)

十月の劇壇見聞.....西尾福三郎(三三)

月よりの使者(見たま).....(三四)

福澤論 吉——脚本拔萃——.....(三五)

**新人批評家集**

○水谷八重子に贈る.....葛原康好(三七)

○阪東壽三郎のこと.....谷 健一(三八)

○前進座の成長.....川上利一郎(四〇)

梅野井秀男とネクタイ.....新谷誠水(四二)

編輯後記.....村上 勝(四四)

天下の銘酒

白雪

酔へば志れる

苦勞しうきも

飲みやれ

白雪朗かに

灘・丹伊津坂  
社會式株造酒西小

… … 劇 同 合 大 派 各 … …

・ ・ 畫の都 第四「水車の唄」 ・ ・



× × 樂士橋本  
× × 百合子

阪東しゅうか  
水谷八重子

座 伎 舞 歌 阪 大 の 月 一 十

畫の部・第一  
「鎌」



夫太小川市・兄 郎三友井伊・官士  
子雪波筑・妹 子久嘉田村・妻



畫の部・第三  
「越後獅子」

男獅子 男獅子 女獅子

小太夫 水谷 かし





畫の部・第二

「福澤諭吉」

× × 舞臺面 × ×

明治維新世は文明開化の時代「牛肉を食ふため  
文明人と心得てゐるもの」「牛肉は流行物だから  
食ふ者」「人に誇るため食ふもの」そうした淺薄  
な人たちの反面「伊勢參宮のすまぬ裡は四足の穢  
れは身に染ませぬ」といつた封建の舊舊に囚へら  
れた人たち……こうした混沌たる世相の日本へ根  
本的新思想を注入し言論文章教育等普遍的な指導  
に明治文化の創造者であつた先生の御偉業御遺徳  
を追慕し、先生生誕百年祭を期して上場するので  
あります、わけて當大阪は先生呱呱の地にして殊  
の他意義深きものがあります

畫の部・第四  
 「水車の唄」

樂士橋本  
 百合子  
 水谷

しうか



「十五年前失踪した吾子が曲馬團の花形として出現」  
 初號活字の三面記事が都下の新聞を賑した頃の事を御記憶ですか、  
 これに材をまつて川村花菱が書下した實話的興味を盛つた運命の子の  
 物語り……

百合子  
 水谷八重子

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

コーヒキヤラメル

チヨコレート

キヤラメル

チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地

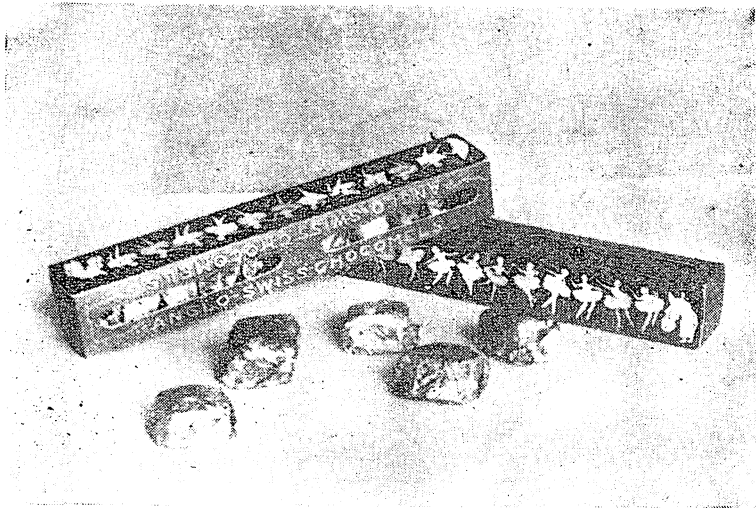
發賣元

株式會社

横山商店

電話東 (94)

四二一  
六〇六  
四一六  
九三一  
番



茶

西區又公守守守

坐半

甫請守守守守守



二第・・・部の夜

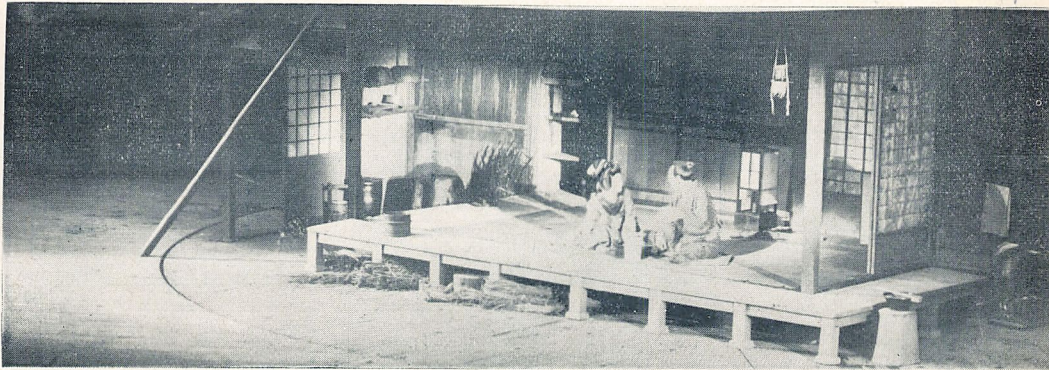
子重八谷水 夏お女狂

「亂狂夏お」



「お夏狂亂」

夫太小 士 馬・谷 水 夏お女狂



三第・・部の夜

面臺舞

「藏以り斬人」

子重八谷水・世 百 妹 ・ 郎三壽東阪・藏以田岡



面臺舞 「藏以り斬人」

だ松虎の宿無はいお 入ら知は佐土もいおたつ言とんら知をいおは佐土」

「いなは足不で者宿無はい

！か抗反！無虚

ばれせさ踪失てつとに藩佐土、しかし。たつ放ひ言は藏以田岡てしと然撫

？かのないならなはて居は藏以田岡ぜな。たつだ藏以田岡いならな

！にめたの志同！にめたの師恩 ！にめたの石萬五十二家内山



四第・・部の夜

子重八谷水

子道口々野

「者使のりよ月」



# クラブ白粉

肌色時代

あたしの喜び……

あたし……  
クラブ白粉  
つけてるの！  
クラブ頬紅  
つけてるの！  
クラブのルージュ  
つけてるの！  
さんごのやうな頬  
いちごのやうな唇  
あたし……  
クラブが大好きよ！



# 御園白粉

上品な明るい化粧美を  
お望みなら……是非……



濃くも・淡くも  
思ひの儘に溶け  
明るい上品な色  
合ひは優秀品の  
第一線を確保  
御園チタニウム白粉  
白・肌 各五十銭

院長  
浅木博士  
壽三郎



内村  
村長さん  
道子  
弘田進



しろうか  
伊井  
水谷  
田之助

弘田進  
道子



田之助  
水谷

「國定忠治」

國定忠治

辰巳柳太郎



・ 座 中 の 月 一 十 ・

演 公 り 殘 名 お ・ 劇 國 新

水谷八重子のオール・トーキー

# 唐人お吉



原 作 川 村 花 菱  
脚 色 川 口 松 太 郎  
監 督 冬 島 泰 三  
撮 影 古 泉 勝 男  
考 匠 山 村 耕 花  
装 置 伊 藤 煇 湖

音 録

ルタンエリオ  
ムテスシ

絶 對 的  
豪 華 版

近 日  
封 切

水谷八重子……吉 鶴  
澤村伊三郎……松 新  
伊井早川……スリルハ

(演出別特)

篇二第ズーリシ様殿・版ドンウサ



# 密隠と様殿

坂東好太郎

主演

小笠原章二郎

堀江清子

光川京子

坪井哲

山路義人

助演

原作 秋篠珊次郎

脚色 藤井滋司

監督 井上金太郎

撮影 伊藤武夫

(2) 「波止場の朝」



吾正田島・吉慎

子世喜松久・いあおの輪密



(1) 「高田屋嘉兵衛」

おゆき  
高田屋嘉兵衛  
おしも

長島丸子  
辰巳柳太郎  
二葉早苗



十一月の浪花座・前進座第五回公演

(3) 「天保六花撰」

上 三 千 歳 嵐 芳 三 郎

片岡直次郎 瀬川菊之丞

下 河内山宗俊 河原崎長十郎





裂 小・具道小  
**貸 衣 裳**

素人演藝會  
 宴會の催物  
 春秋溫習會  
 婚禮の衣裳

其他一般の衣裳多に不拘御利用  
 さぐり來客の御相談に應じ便利く  
 .....お取り致しす

**松竹衣裳部**

本店  
 大阪市浪速區南坂町松竹ビル内  
 電話 戎 五 六 三 四 番

東京支店  
 東京市淺草區駒形町二十三番地  
 電話 淺草 六 六 六 一 番

# エキセ

迅速効奏 刺戟無痛無

# 陰囊疹

(病膚皮)

特効薬

エキセは多年臨床實驗を経たる新薬にして世上のいんきん賣薬の如き疼痛、刺戟及角質溶解の作用を有せず、「リポイド」に可溶性なるが故に皮下深部に到達し消毒殺菌の兩作用迅速で治療的効果を顯はす

性狀

アルコール又は油質を含有せざる液體

定價  
一圓五十錢

全國藥店にあり

發賣元 光榮商會

大阪東區伏見町三丁目

振替大阪三三一一七番



「ふ喰を牛」 (1)

藏 鶴・屋勢伊 郎十長・クツコ 岸 山・ねよお



(2)

「心中越路の雨」

商人 彌之助

中村翫右衛門

遊女 おしほ

河原崎國太郎





「花 紛 白」 (3)

子 蓮 瀧      ん り 小 妓 藝 ・ 男 秀 井 野 梅      舟 お 妓 藝

(1) 「入選」

梅原 小夜子  
吉澤 夜子

中山 瀧中

村田

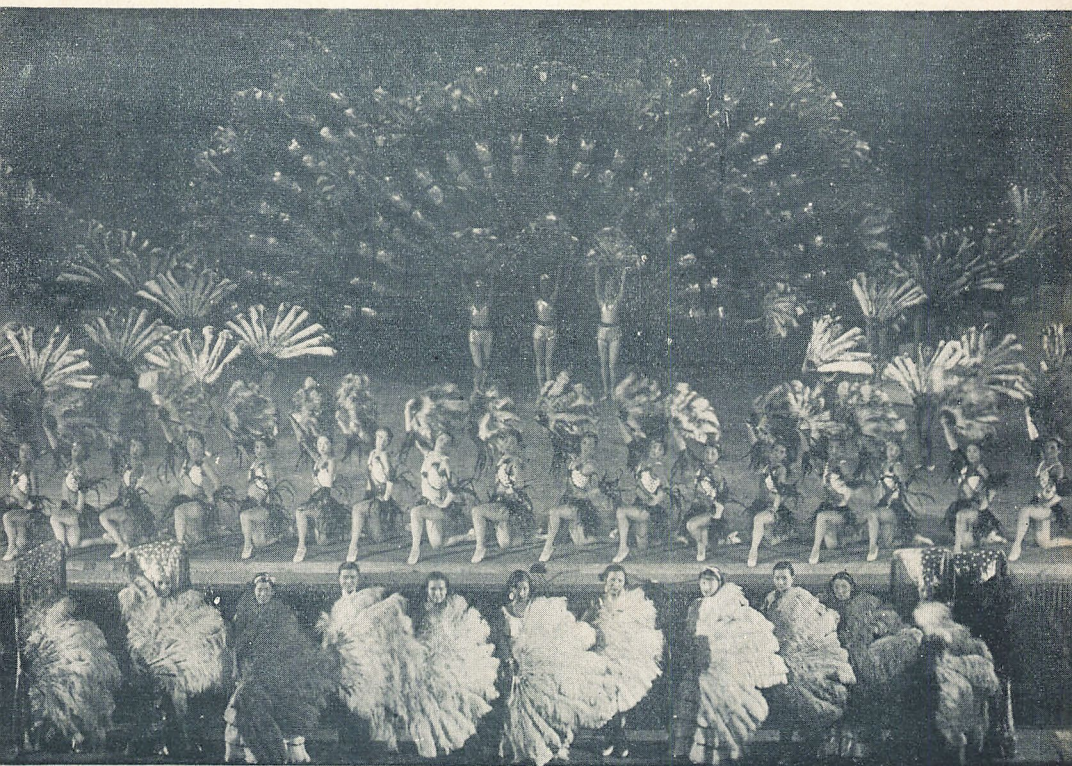


(2)

「小判で五千兩」(上)

無宿の清藏	都
太七女房	梅野井
目明し新吉	山口
亭主太七	河合





大 阪 松 竹 少 女 歌 劇

「 秋 の お ど り 」

第 六 景      ク リ ザ ン ・ チ

年 中 行 事 大 阪 名 物

・ 十 一 月 大 阪 劇 場 ・

藝雅·究紛劇演·刊月

# 通類編

第九年

十一月號

第九十八輯



院之印  
阪東舟三郎  
一九三二  
留聲  
十月の歌存仕度  
水車の吹

上演狂言に就いて

# 八重子

## 「お夏狂亂」

### 坪内逍遙

八重子の「お夏」は今度が三度目である。初演の明治座の初日などは流石に辿々しいところが多かつたが、作意を説明したり、妙でない角々の指圖をしたりしたら、熱心に勉強して、同興行中にさへ滅切進歩したと聞いた。二度目は東京歌舞伎座に於ける演劇博物館の催し。此時は、初演の初日などは丸きり別人のやうな上出来であつた。三度目には、更に一段の上達が期待される。

八重子の振は梅幸の直傳、其關係上先月の東京歌舞伎座の名残の「お夏」

を八重子は、二度までも観に任つたさうだ。初めの日に、梅幸を樂屋に訪ねると、「オヤ、観に來たのですか？ 實は、今度は、病後の身を勞つて大ぶ手を抜いて演じてゐるのだが、ぢやア今日だけは、お教へした時の通りに抜かないで踊りませう」と云つて、克明に演じたさうな。尙その後、沙汰なしで更に觀に任つたところ、此時と其時とは、大變な相違。しかも其手を抜いた簡略な演じ方でも、舞臺は寸分も隙がなかつたので、名優とはいへ自由自在なものだ、と恐れ入つて、つくづく感心しました、と八重子の話。

本来、此舞踊は、私が「新曲浦島」を發表して、新舞踊劇を提唱した際の際のやゝ妥協的態度の作なのである。これなら、在來の役者や踊り子にだつて容易く演ぜられさうなもの、而も其間に

暗に一種の新意匠をも發揮することが出来るだらうといふ考へで作つたもの。すなはち、文藝協會の出し物にして、養女をシテといふのが最初の目的。作曲は故常盤津八字兵衛、振は故藤間勘右衛門、二人ともたびく宅へ來て貰つて、いろ／＼勝手な諷刺や注文をして、養女や甥に稽古をさせるまでに仕上げた。が、それでもまだ満足しかねて、故藤間勘八に多少修正を命じたりした。衣裳、假髮の好み、道具背景の意匠等も、其際、親交の畫家を相手に様々に試みて見た。衣裳の模様は現在のと同一、梅幸の工夫で襦袢や染色は多少變遷したが、舞臺装置も、私の初案は廣重風、それを考へ直して二度目からは光琳風にした。梅幸の希望で、名残の上演は初演當時の廣重風にする筈であつたが、座方の都合か何



かで、似も附かぬ粗悪なものになつてゐた。

ついで、話が外れたが、八重子は、明治以来、當人の懇望で、たびく私に直接に説明もしたし、指圖もしたから、作意を理解してゐる點では、多分、現下の第一人者だらう。梅幸の帝劇での初演は大正三年、其際、同丈はわざ／＼宅へ来て、振を養女から取つたのだが、「勿論、新案を加味なさい」と私から勧めもしたし、かた／＼、丈自身の工夫がところ／＼に追加された。それが爲に、興味の細やかになつた箇處もあるが、年の経つにつれて作意と齟齬する點も幾らか出来た。例へば「何ぢや、嫁入ぢや」のセリフ、あれは幻覺で嫁入りを想像し、他人の幸福を嫉む悟氣の思入れでいふのが本意「花嫁御の名は」までは嫉妬の表情。

と、いづこともなく「名はお夏さん!」といふのが聞えたといふ心持で、いやらしくニヤリと笑ふといふ段取。梅幸はいつても此點を忘れてゐた。其癖、先月は一寸其趣きを見せてゐた。八重子はそこらは善く吞込んでゐる筈。

要するに、此作は只の舞踊ではなく舞踊劇なのだから、ラドリは四分か四分五厘、シバキを六分か五分五厘といふ兼ね合ひで演ぜねば作意に適はない。(先月の梅幸は、からだを厭つて、ラドリ三分、シバキ七分で演じてゐた)で、いかに舞踊手としては練達してゐても、平生シバキを演じ馴れてゐないと満點の成功は收めにくい。藝妓連や普通の踊り子にはそのハンデキヤツプがあるわけだが、少くも其點は演劇を本領にしてゐる八重子の強みでもあらう。(九、一〇、二七、病褥中にて)

## 「鎌」のゝん

岡本綺堂

この一幕物は本年一月發行の演劇雜誌「舞臺」に掲載、その翌月の東京劇場で上演されたもので、雑誌に發表の當時、わたしは左のはしがきを添へて置いた。

「これは先年、紐育のワシントン・スクエヤ小劇場で好評を博した Clod (土百姓) といふ一幕物に據つたものである。不法の暴力に對する必然の反抗を描いたもので、原作は南北戦争當時の出来事となつてゐるのであるが、舞臺の都合上、それを滿洲の世界に改めた。

又、そのテキストを先年の震災に燒き失つたので、單に舊い記憶をたどつ

て、私が勝手に脚色した結果、有意に或は無意に、原作とは頗る相違したものと成つて、勿論翻譯でもなく、さりとして翻案でもなく、殆ど私の創作ともいふべきものと生まれ變つてしまつたのである。しかもこの原作を知つてゐる人がこの一幕物を讀めば、おそらく原作を想ひ起すであらうと察せられるから、こゝにその來歴を説明して置く——」

この作について、私が作者として云ふべきことは、これに盡きてゐる。更に蛇足を添ふるの要を見ないのであるが、前にいふ「不法の暴力」——それが米國の南北戦争當時に行はれたか何うかを知らない。而も三年前までの満洲には當嵌るやうに思はれる。軍閥が不法の壓迫に對し、満洲の人民が結局堪忍袋の緒を切つて、奮然起つて

彼等軍閥を打倒し、我等の満洲を建設すると云ふことを、農家の一悲劇によつて象徴しようとして企てたのが、私の作意である。わたしが舞臺を満洲に取つたのも、その意味に外ならない。原作は際物でない。それを際物化したのは私の仕業である。それも重ねて斷つて置く。

## 天保六花撰に就いて

平田謙三郎

六花撰とは、お敷奇屋坊主の河内山宗俊と、御鳥見役の御家人片岡直治郎と、猷殘間屋實は海賊の森田屋清藏と、劍道指南實は流山無宿のピン小僧金市事金子市之丞と博奕打ちの無頼漢くらやみの丑松と、吉原の半藏松葉屋の抱え遊女三千歳の六人であつて、此の六

人が巴となつて色と慾との二々筋道の大胆な行進曲が事件の全體であつて、かうした人物の活動するには、時世は徳川末期の頹廢しきつた天保といふ誠に生活の樂な、遊んでゐても、商賣往來にない商業をしても、暮して行かれないと云ふ誠に結構な世の中であつたので少し位ひな強請や、かたり、などゝ云ふものは大目に見られてゐたかの様な時代であつたので、さうした時代の浪に乗つて、泳ぎ廻つた河内山宗俊は茶坊主、つまりお敷奇屋をつとめてゐるといふ、背景のいゝ所から、町人相手にすいぶん無謀な悪さをして通つたもので、此の點片岡直治郎も同斷で、御家人であるといふ肩がきを振り廻して、支配違ひの町役人が、彼等の現行犯でも手の出せないのをいゝ事にして盛んに横車を押して通つたものだ。

悪事といつても實につまらない、少しの金にでもなればいゝといふ、腹の浅い事ばかりしてゐるので、河内山の事件などは、上野の宮の御名前を利用して、例の質屋の娘を松江侯の邸から助け出す位ひが一生に一度の大仕事位ひなもので、あとの事は極く手近な、強請とか、かたりをやつてゐるに過ぎないので、此の點が又非常に現實味があつて面白い。人殺しとか、國事犯とかいふ様な事ではなく、常に生活慾に限られてゐた犯罪であるといふ事が面白い見られ、且つ當時の社會状態がわかるといふもので、金子市之飯と森田屋清藏といふのも、講談で云ふ處の大泥棒でもなんでもないので、たまたまさうした平凡な生活的になんの動きもなかつた天保時代の産物としてのみ特別な扱ひを受けてゐるに過ぎないので、

だから金子市之飯や、森田屋清藏の件になると、講談でも芝居でも面白くもなまなくかけてゐない。河内山とか直次郎とかいふ事件の方にだけ多分の眞實性がふくまれてゐるのは當然な事である。遊女の三千歳などいふ女は、明治十五六年迄生きてゐて末路は、品川あたりの小魚屋の女房で終つてゐるし、直次郎は直次郎で居酒屋の亭主に納まつて其の晩年は、實につまらなく行路病者の様な死に方をしてしまつてゐるし河内山も召捕後に、河内山の口がばれると、各大名、旗本連の内狀が表向きになるといふので、毒殺された事になつてゐるが、それも間違ひで、それ程事件を重大視したのでもなんでもないので、極く軽い罪で許されこれも晩年は、みじめな終りをつげてゐる。總じて小味な事件といふ事が、天保六花撰

の興味であると共に、六花撰と物々しく銘打つて飛び出して來た所に、昔の作者のいゝ所があると思ふ。默阿彌が手をつけた時の最初の配役は、河内山の團十郎、直侍の菊五郎、丑松の小次郎、三千歳の半四郎、松江侯が今の羽左衛門の家橘時代、今日では六花撰の狂言も、質店から松江侯の邸、入谷のそばやと大口の寮だけになつてゐるが、結局面白い場面だけが、残つてゐる事になつてゐる。今度の脚色も、伯龍の口演が主で、役者の役もめのない前進座だけに、思ひ切つて脚色して見たといふ事は云へる。

### 次號の道頓堀は

吉例顔見世特輯號  
御期待願ひます

# 鎌

## 一幕

——見たま、——

滿洲事變初期の頃北滿某村落に於ての事であります。雪霏々たる夕べ、とある一軒の農家では主人の留守を妻と妹とが守りながら、此邊りまでも流れて來た戦争の噂話に、何となく不安の思ひにかられて居ります。ト、其所へ吹きこむ雪と共に飛びこんで來た一人の兵士が居ります。そして驚く妻や妹に問はれるまゝに、彼は語るのでした。——お前達も薄々知つてゐるだらうが、先頃から奉天を中心に滿洲獨立の運動が起つて、北平の軍閥をみんな追拂つて、新しい自由の國を建てやうと云ふのだ併し滿洲にゐる軍閥系統の將軍達も、流石に素直に承知しないので、此頃はそこでもこゝでも戦ひが始まつてゐる。俺達もこの際、い

つそ滿洲方に歸順しようかと、夕方から雪の降り出したのを幸ひに、つそり脱營を企た處が、運悪く見付けられて、直ぐにあとから追つかけられたのだ——、とかう云つて彼はしばらくの間隠まつて呉れと頼むのでした。妻も其言葉聞いては氣の毒にも思ふのでしたが他人の事よりも我身の上です、若し此間にも追手が來てはそれこそ身の破滅です。そう思つた妻は強つて兵士を表へ出してさふのでした。

ト、間もなく此家の主人も歸つて來ます。彼は冬籠りの用意の爲に、種々食料や日用品を買ひ集めて來たのですそしてこれから夫婦兄妹三人が水入らずで、楽しい平和な食事を始めやうとする時でした。表の扉を破れよとたゞく者があります。主人もたつた今妻や妹から、脱營者の來た事を聞かされてゐますので、三人は息を殺して様子をうかがつてゐましたが、扉を叩く音は愈々激しく——明けろ

早く明けろとの怒號まで聞こへます。遂に主人は思ひ切つて立ち上り、怖る／＼扉を明けますが、それを待ちかねたやうに一人の士官と三人の兵士が這入つて來ます。彼等は先刻の脱營者を追跡してゐるのでした。士官は型の始く三人を取調べると共に、兵には家探しを命じます。何所にも居りませんので、兎も角も兵をして尙追跡を続けせしめます。そして自分は一入此所に留り、おびえきつて居る三人をござなりつけながら、酒肴を命じ妹をからかつたり亂暴のかざりを盡すのでした。が、此家の者をして更に怖れ驚かせたのは、先刻出て行つた管の脱營兵が、何時の間にかこつそり寢室にひそんでゐた事でした。若し士官が彼を見とめたなら……。思つただけでも、其結果の恐ろしい事は、想像されるのでした。三人はハラ／＼するのでしたが、幸ひに仕官はそれに氣がつかず酒をあほつてゐるのでした。そして勝手な事をがな

次號は特輯見世號です。これに機會を會

本年極め御購讀をお申込み下さい。

一ヶ年 “道頓堀” 三圓十三錢

り立て、少しでも自分の意にさか  
らへば容赦なく主人や妻をなぐり  
つけるのでしたが、果は妹を慰も  
うとまでします。これを主人や妻  
は憤ひ金を出してやつと許して貰  
ひますが、士官は尙も其上に馬を  
も奪つて行かうとするのです。然  
し此家の者として、其馬がなけれ  
ば本當に困るのです。妻は狂氣の  
やうになつて、それ丈は許して頂  
きたいと頼みますが、士官がそれ  
を聞く筈はなく、主人に命じて馬

小屋へ案内せしめます。ト、其後  
に姿を見せたのは先刻の脱警兵で  
す。妻は見るなり自分達がかうし  
た目に會ふのも皆お前の爲だと、  
喰つてかゝりますが、兵は其所に  
あつた食物をむさぼり喰べるがい  
なや、置いてあつた士官のピスト  
ルを持つて、出て行つて了ひます  
妻はそれを持つて行かれては又大  
變と、跡を追はうとして、バツタ  
リ士官と會ひます。そして士官  
が二頭の中、好い方の馬を持つて

行くと云ふ事を聞き、逆上した彼  
女が研ぎ澄ました長柄の大鎌をと  
るなり、やにはに士官に斬りつけ  
ます。主人は驚いて一旦は妻を支  
へやうとしますが、もうかうなつ  
ては仕方が有りません。自分も亦  
鎌を持ち出して妻に加勢し、士官  
をやつつけて了ふのです。  
そして夫婦は顔を見合はせたま  
ゝ狂的に笑ふのでした。あけ放さ  
れた入口からは雪がはげしく吹き  
込みます。

「鎌」配役

- 士官 伊井友三郎
- 兵士 澤村百々左衛門
- 同 市川新吾
- 同 市川光秋
- 脱走の兵士 村田正雄
- 兄 市川小太夫
- 同妻 村田嘉久子
- 妹 筑波雪子

水車の唄

歌 舞 伎 座 一 十 月 興 行

上 演 脚 本 拔 萃 (1)

作太郎

百合子

もう行くのか？  
え、……此の土地に居れ  
ば、又あの人達につかま  
りますし、橋本さんもど  
んな目に會ふか分りませ  
んし……そして又、あな  
たに迷惑をかけるやうで  
は、私あんまり勿體ない

作太郎

……日本中たづね廻つて  
どうしても會へなかつた  
ら……私あなたをお父様  
だと思つてもいゝでせう  
か。  
あゝさう思つてもらひた  
い！あゝ怎しても手離せ  
ない、我が子にちがひな  
いと思つても、お互ひに  
證據がなければ他人同志

百合子

だ！もう一度しづかに考  
へてくれないか……  
何か昔の記憶はないか……  
少し一人で考へて見るだ  
(と水車の奥へ這入る)  
百合子はたつた一人で考  
へてゐる。と昔の水車番  
の風をした作太郎が出  
る。  
アツ！

# ありふれ隨筆

— 前進座のこころも —

## 大橋孝一郎

僕は何時もう思つてゐるのだが、歌舞伎役者の修業と云ふものは、實に豪いものだと思つてゐる。故人の藝談を讀んでも、今の人々の噂を聞いても、到底普通人の考へ及ばない

様な修練の苦行を積んでゐる。全く頭が下る位である。ヤツと物心が付いた子供の時代から青年期壯年期を経て、老年期に至るまでそのことごとくを修業の生涯として果てる。云はゞ藝道の爲に殉死するのである。此處が、あらゆる藝術家の値打のあるところだ。今一寸舞臺に動いてゐる人々に就いて考へて見ても、たいていの人は五十近くから六十、七十と云ふ高齡の人々のみによつて演ぜられてゐるが、かう云つた長い修業年月を経なければ、自信を以つて人に見せ得るだけの藝が打てないのが本眞うだ。殊に感心させられるのは、立役を除いた助役級の人々が十年一日の如く、立役を助けて甲斐々々しく立働いてゐることである。これなどは、中々並大抵

の氣持で出来ることではない。藝だけの問題ではなくして、人間としての修業と云ふことになつて來ると思ふ。

×

近頃は藝談はやりで、一流雑誌に名優各自の藝談が次ぎと連載されてゐるが、誰れのを讀んでも必ず「今の若い人は怠けて、進んで修業をしようとはしない。またそれを強られもしないのだからお樂です。」と云つてゐるが、これはあながち所謂若手ばかりに罪があるのではない。その機會を與へない興行者の方にも幾分かの罪は負はなければならぬと思ふ。これは、ひきつめて云へば時代の推移と云ふことになるのだが。昔は今の様に歌舞伎と云へば歌大舞伎のみに限つてゐた譯ではなく、門閥の御曹子輩が子供芝居をやつてゐる、かと思ふと一方には青年歌舞伎があると云ふ具合に、立働いて競演する舞臺が多かつた爲、お互ひに勵みが付い

て、自然、藝熱心となり、おのづと藝の盡になる仕組みに出て、然し現在とは見渡すと歌舞伎と云ふものは全く一つの劇場に集中されて終つた観があつて、御曹子達にしても親爺が動けなくならなければ、幾らアセクしたつていゝ役が付く譯でもなし、これでは自然と氣持が陳腐になつて行くのは自明の理ではないか。東京の方だと、またしも、比較的青年歌舞伎を打てる機會に恵まれてゐるのだが、關西の方は残念乍ら實以つて振はないこと夥だしい。この結果は引いて將來の關西の歌舞伎に取り返しのない非常な悪い影響となつて現れるのではないかと、今から案じてゐるのだが、これは決して僕一人の心配ではない様だ。その意味で近頃時折り催される若手奨勵劇は、不入に拘らず俳優達には非常に修練の機會であり、歌舞伎界を賑やかにして行く、最上の試みだと思ふのである。

しかし、幾ら振はないと云つても矢張り歌舞伎役者の藝は何處かにしツかりした處がある。三百年傳統の力が、舞台上に並んでゐる隅々の役者にまで染み込んでゐる様だ。試みに、今ある新劇團からその幹部二三人を取除いたと假定する。これで芝居が打つて行ける様なればお代は要ない。一夜づけの

藝は此處で馬脚を現はすだらう。それに引競べて歌舞伎の方では、その一人々々を切り離してやらせてみても、左程見慣い藝は打たない筈だ。これだけの差が修業とそれに伴ふ品位と云ふ二字から生れて来るのだから、仕方がない。關西の若手諸君にしてもそうである。それ〴〵大きくのびて行く機會をもつと多く作つて勇往邁進すべきだと思ふ。今のまゝでは餘りにも氣魄に缺けていやすまいか。此の點、今月も大阪で公演してゐるが前進座あたりの意氣を大に見習ふ必要があると考へる。長十郎にしたつて、狹右衛門にしたつて、大歌舞伎に交つてゐた頃には、極めて影の薄い存在だつた。それが今ではどうだらう。食ふや食はずの苦行時代を立派に乗り切つて、大歌舞伎の連中を向ふに廻して、小氣味のいゝ活躍振りを示し、劇壇に異色ある地位を占むるまでの躍進ぶりを見せて來たではないか。

およそ一つの劇團を組織し、これを永續させて行くことは並大抵の苦勞ではない。昔から「衣食足りて禮節を知る」とはよく云はれる言葉だが、どうもあんまり當になる言葉ではないと思ふ。殊に黄金萬能の世の中では、衣食足りて返つて禮節が亂れ勝ちになるやうである。俳優達でも其の通りで、

金のない間はどうにかかうにか喰ひ付いて、「飽く迄僕達の劇團を……」なぞ豪らさうなことを云つてはゐるが、一たび芽がふいて來やうものなら、すぐに増長し出して、それこそ手にも足にも負へるものではない。あげくの果てが飛び出して行くのがお定まりの公式だ。前進座は意氣もあり、結束も珍らしく固い統制がとれてゐる。これが前進座の何よりも力である。しかし、意氣や統制のみでは芝居は出來ない。矢張り畢竟藝の問題になつて來る。ところが、そこがそれ先きも云つた通り、歌舞伎俳優は一人々、切り離してみても相當芝居をやりこなして行ける修業を積んだ人ばかりであること、此の劇團の人々に依つて、シツカリ立證して終つた譯なのだから、前進座の人々はいよいよ大いに誇つていゝ譯なのである。

X

もともと前進座は古劇の復活と云ふことを一つの標榜として進んで來た。事實此の一座の仕事を振返つてみても、彼等の此の標榜するところのみ大きな此の劇團の存在價值があつた様だし、これから先きもあることと思はれる。これに就いて此の劇團が渥美清太郎氏の指導を得てゐると云ふことは非常な力強さと云つていゝのである。前進座の古劇が氏のよ

ろしき指導を得て、劇壇の一異彩とまで評價される様に至つたのは、一座の人々の血の沁む様な努力もさることながら、長十郎、柳右衛門、國太郎三人三態の個性を、南北の作品に適合させた渥美清太郎氏の慧眼、先づ此の劇團を成功せしめた第一のものとみて一向に差支へはないのである。此の一座が南北劇場と稱されるのも豈故なきところではない。長十郎の重ツくるしいグロ味、國太郎の凄艶なエロ味、柳右衛門の銜はない古典味のトリオは南北物と不思議な位に融合して、素晴らしい舞台効果を見せ、江戸文化廢頽期特有のあやしくも美しい霽剛氣が觀客席の隅々にまで、惱ましく立響めて行くのであつた。このことは關西の方々にも、既に前公演の『お染の七役』に依つて試験済みのことと思はれる。

X

前月の新橋演舞場では、南北物ではないが古劇『廻船斬』を例に依つて渥美氏の改訂指導に基いて上演してゐたが、これは餘り原作を苛り込み過ぎた爲、何時もの南北物程の好評ではなかつた様だが、それでも十月の芝居中では一番面白かつたとの評判だつたし、長十郎の怪盜日本駄右衛門は中々立派だとの噂も聞いた。これなどもそんなに無理して苛込まずによつたりと通してやつて呉れたら、随分面白い大時代な芝



居が見られること、残念に思つてゐる。さう云へば通し狂言と云ふものが全然見られなくなつた今日、かう云つた特種な一座の人々に依つて、ゆつたりとした通し狂言を味合せて呉れるのも、まんざら悪い氣のものではないだらう。僕は近頃の様、三つも四つも題名を並べなければならぬ興行法がうらめしくもさへ思はれるのだ。

河原崎一門。世が世なれば河原崎座を根城として立派に豪つてゐられる人である。それを思へば彼等は感慨無量ともな

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印

ウキスデキ  
キムラツト  
ベユモツト  
キユミソ  
ジバミソ  
滋養葡萄酒



元 賣 發

横山商店

株式會社

大阪市東區豊後町三番地

電話東(94) 一六六一  
二〇一三  
四六四九

るであらう。しかし全ては若い。これからである。明日の歌舞伎を背負つて立つ此の一座の前途は洋々として、はてしないと思はれる。グーツと嘴みこらへて、頑張つて、修業することが、今の一座の人々にとつて一等いゝ仕事なのである。紙面がもうズツと超過して終つた。その一人々々に就いてもつて語りたかつたのだが、これはまたの機會に譲つて今月は此の邊りで筆を擱かう。今は前進座の大願成就する日を期待し、大阪數度の來演が、大阪の若い俳優達に何かを暗示し、鞭打ちともならむことを、偏へに願ふばかりである。

チグ・ザグ・樂屋訪問 (1)

辰巳柳太郎の卷

文 村 上 勝  
繪 妹 脊 平 三

漫畫家の妹脊さんと私——同行二人で、中座の樂屋に新國劇の辰巳柳太郎君を訪ねる。

丁度——樂屋口で辰巳君に會つたが、「東郷盆」の途中なので、仁義を發することが出来ない。で、辰巳君の體があくまで、正木君の部屋へ行く。時間待ちに正木君を訪ねるなんて、いさゝか失禮だが、事のついでに

正木君の妻君のオノホケなど聞くのも意義あることだらうと思つたからだ。

正木君は部屋で新國劇リーグ戦のプロマイドに、色々と註を書いてゐる。

曰く、ヘツピリ腰だが、カツ飛ばすぞ——見れば、島田君が、バッテリーボックスに立つてゐる。その後にはひかえ

てゐる、新國劇では名審判とされてゐる伊藤君が、金あみをかぶつて頑張つてゐる。

妹脊君、沈黙——私、意味ないことを話す。「お鶴さんの居る家へお帳面で行かう」と。

舞台は「東郷盆」第二幕丸龜在の場末の街路で、長島さんの花嫁が通つて行く處である。確か、辰巳君この場であんまになつてゐる筈だ。

芝居はこの場から二十八年後になつるので、辰巳君も小川君も、メイキヤツプを變へなくてはならない。この幕合ひに——と正木君にさうならを云つて、辰巳君の部屋に行く。

大きな鏡台前で、辰巳君は、老役に早變りだ、時間がないので、早速質問を試みる。愚問！か、賢答か——それはお讀みくだされば……………。

問 (1) 「國定忠治」を演じてゐる時の気分は!!

答「忠治」を演つてゐる時は、この劇

の新しいとか、古いとかを超越して愉快になれるデス。これは、自分が

舞台で、ヒロイズムに酔つてるから

ぢやありません。見物が、我々、舞

台のものと、トケ合つて朗らかに喜

んでくれるのが原因だと思ひますが

.....。

問 (2) 女に關しての失敗談はありま  
せんか。

答 女に關する失敗はするぶん——數  
えきれぬ程——あります。これは僕

がすべて馬車馬式にやつたからでせ

う。然し、現在の僕はまじめな女性

觀をもつてゐますから、女は至つて

好きで惚れますが、過ちはないと

——思つてマス。神戸の一件(社

辰巳君が、神戸松竹劇場出演中喫

茶店ガールに戀して、朗らかな駄

々兒振りを發揮したと云ふデス)

なぞは、失敗談であると共に甘酸つ  
ばい思ひ出になりますね。

問 (3) 演り易い劇場、演り難い場合  
は!!

答 中座に現在出演してゐるからぢや  
ありませんが、一等中座が演り易い

劇場。旅興行なぞに行くと、非常に

演り難い劇場があるデス。それより

も舞台で一等困るのは、子供の泣き

聲——が、いけませんね。而かも比

較的に大阪に多いのは、どうかと思

ひます。泣く子供はがんぜなくつて

芝居なんか判りつこないんですから

泣く子供に 罪はありませんが、觀

劇道徳として、何とかして欲しいの

が、我々、俳優の希望の一つです。

問 (4) 今後は現代劇に進まれます  
か、時代劇でせうか。

答 時代劇は餘り演りたくないです。

現代劇を演りたいです。悲、喜劇を



論ぜず現代劇を望んでます。處が、脚本難でして……適當なものがないデスね。

問(6) 苦闘時代の貧乏噺をして下さい。

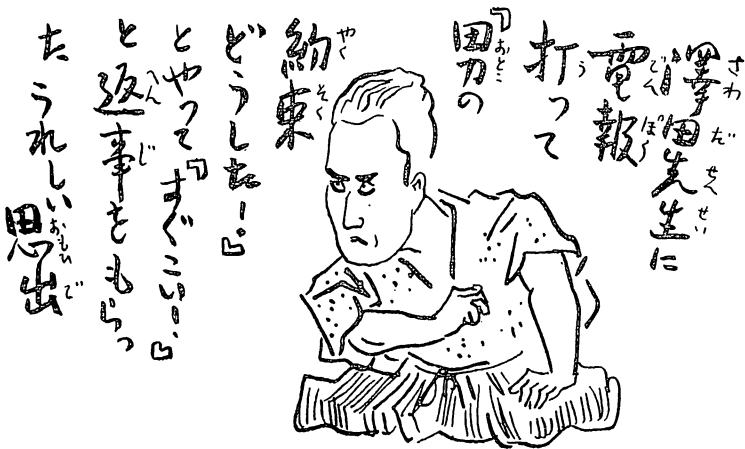
答 その一、市村座出演中の事です。劇場へ行くおあしがなくつて、銀座の四ツ角に立つて、誰か知つてる人をつかまへて、バスや電車に乗つて貰つたデス。その二は御飯を三人前、お菜一人前——十五錢のおでん——をとつて、その十五錢のおでんを三度に分けて食つたことがあります。それよりも最も淋しかつたのは更生後の旅興行で、僕が「堀田隼人」を演じてゐる時、幕あきにお客が三人しかなくつて、客席へ體のあいてゐる座員が廻つたりしました。この時ばかりは台詞を云ひながら泣けて來ました。

問(6) 現代の女性をどう思ふデス——か

答 モダン・ガールにしろ、フラツパ——にしろ、或は藝者にしろ——それらしくあればいゝといふ一語に盡きると思ひます。僕の嫌ひなのは、男女同権など叫ぶ女で、男を尻に敷く女性なんか、漫書家の材料にはなるとも好意は持てませんね。

問(7) 隠し藝があれば公開してくれませんか。

答 僕は隠し藝なんてありませんね、全く都々逸一つ唄へないんです。流行歌でも苦心に苦心をして覚えて、やうやくかすかに唄へると思ふと、トタンに次の歌が流行つて來ると云ふ次第です。但し、秘藏藝は寶塚國民座にゐる頃に研究？したんですがあの凸インズに寫るやうな顔をして見せることデス。隠し藝と云へば、



まあこれでせうかね。

問 (8) 澤田先生に感銘したこと、偉さなどに就いて。

答 よく叱られ——時にはふざけもしました。感銘した話はありません。中でも稽古など三日三晩ぶつ通しで演つた時は驚嘆すると共に、如何に演劇に對して先生が熱を持つてゐるかを知り感銘しました。

問 (9) 初舞台は——どうして新國劇へ入りましたか。

答 二十二歳の時に國民座のテストを受けてパスしました。舞台人になつた理由は、両親がなく、頼つてゐた兄も死んで、全くの孤兒となり、唯藝術家になりたかつたからです。音楽家にならうとして失敗しました。かけ引の出来ない僕は商賣人にはなれないと考へてゐたデス。新國劇へは紹介狀を買つて、澤田先生に會ひ

に來ましたが、なかく會つて呉れません。熱です。根です。毎日浪花座の樂屋へ來ました。僕の熱がやうやく認められ、或る日やうやくお會ひ出來、「明日から來い」と云はれました。この時ばかりは天に登る心でその翌日勇躍浪花座へ赴くと、新國劇は打上げ、東京へ歸演してゐるぢやありませんか、癪にさわつて、東京へ「オトコノヤクソク、ド、ウシタ」と電報を打つたデス。これに對して、先生から「スグ、コイ」と電報が來たので、東京へ行き、入座したのです。……

この邊まで話してゐると、次の幕のベルが響いて來た。老役のメイキヤツプの出來た辰巳君は舞台へ——妹君君と私とは、その部屋を辭した。



さて來月はどんな質問を持つて、どなたを訪問しませうか。讀者諸氏の御希望をおきかせ下さい。

道頓堀編輯部宛

一葉散る悲しみの秋



片岡家十一代目

# 仁左衛門逝く

道頓堀を通る仁左衛門の葬列



大阪歌舞伎座十月興行の片岡若燕襲名の口上場に風水害の  
見舞を兼ねて出場し、狭骨を誦はれた片岡仁左衛門、去る十  
月十六日朝八時二十分、卒然と逝去した——享年七十八

# 皮肉だつた仁左衛門

## 食 満 南 北

羽子板に矢張皮肉な仁左衛門

といふ誰やらの川柳があつたが、中村仲藏以來の皮肉な爺さんであつた。尤も仲藏には可なり皮肉られて、大きくなつた片岡秀太郎尠しは仲藏ばりのところがあつたのかもしれない。

私は初め我當を最辰にしてゐたので引幕も贈つた、積物もした、さうして當時子役だつた太郎——今の龜藏——や秀郎などもよく連れてあるいた。それが作者として我當の家に寄食する事になると、

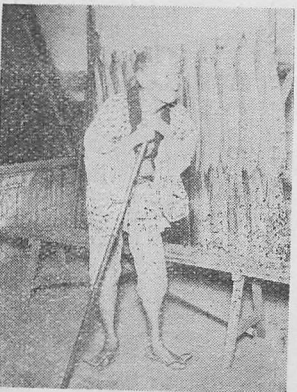
「ナア私の口から食満はんくと云ふて使ふ事も出来まへん



藏 本 川 古 加



齋 江 満 部 岡



作 平 助 雲

やる、一つえゝ名つけまつさ、東西南北といふのらんどらつしやる」これが私の「南北」を名乗つた最初である。爾來久しく片岡に附いてゐた。其うちいろいろ皮肉な片岡を觀た。

下の關で「伊勢音頭」が出た、時間がない。「万よべ」で打出すことになつた、すでに舞台へ出てゐる片岡にそれを傳へねばならない、私はそつと黒衣を着てうしろへ行つた。

「万よべ」で打出しまつせ。

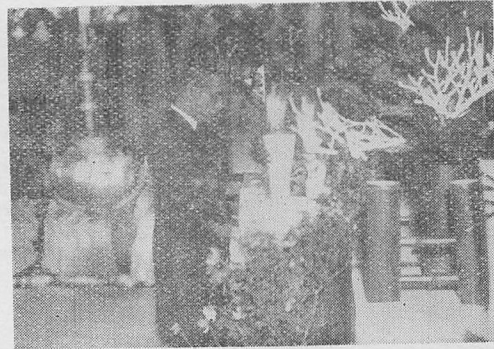
聞こえたのか聞こえぬのか、何にも云はない。私は又

「万よべで打出しまつせ」

二三度くりかへした。

「わかつてる」

と大きな聲で云つたのがチヨンクになつた。這入つて來て



「南北さん、わたいの貢は万よべでは打出されまへんのや」

ハ、ン、其處で

「解かつてる」

とキツカケだつたのか、私は面白い人だと思つた。

片岡ほど船の嫌ひな人はない、これが廣島興行の時例によつて、癪にさえた事があつた。

「サア皆宮島へ行かう」

と云ひ出した。其日は可なり風が強かつた、ゾロ／＼と弟子も、はやし方も、チヨボも、作者も一同お供した同勢四十何名しかし風はいたづら者で、嚴島への連絡船は棧橋破壊の爲其日は出なかつた。癪にさえた廣島へは歸れぬ、サア誰でも和船を云ふて來い渡つたる。片岡は前の茶店で冷酒をあほつてゐる。眼の色をかへたのは野澤吉十郎といふ三味線引きだつた。

「大將この風、この雨、この波に渡らなくても又といふ日があります」

「イヤか忍いのか、やめとけ、サア船が出来たら命の惜しいない者だけついて來い」

勢にのまれた、一同はトマをかけた和船へ分乗した、しかし波は遠慮なく船の上を越した。

「南無妙法蓮華經」

船は一時間餘もかゝつて宮島へついた。命びろひだと云つて破天荒の散財をした、其處にいかにもまげすぎらひの片岡の面目が躍如としてゐる。

「サア南北さん、仁左衛門と改名するのに量貞先への挨拶状が判ですつたりしたら仁左衛門らしくない、あんた書いとくなはれ」

片岡の皮肉はよいが、私はこれが爲仁左衛門襲名の挨拶状を千枚書いた。さうして私は二十日あまり片岡家につめきつた。

しかも三度々當時あづまといふ料理屋から御馳走が來て、一本つけて貰らつたのをチビリ／＼とのみながら……書いたく……千枚はたしかに一大事業だつた。

一日がはりの忠臣藏、片岡は師直、由良之助、などを引受けてゐたが、端役に出て師直には出なかつた。表からは是非師直をやつて貰らつてくれと云ふて來た。

「ひとつ師直を」



といふと

「唇をもつて来てくれ」

妙な事を云ふと思つて唇をもつて行くと、くりかへしながら

「折角やけどけふは師直をやつたらいかん日や」

恐らくそれは判官の命日だったのかもしれない。断はりをい

ふにも片岡はこんなに皮肉だった。

氣に入らない事があつた、彼は例の如くのり紅の手をそこら

中でふくかはり、ベタリツと芝雀（のちの雀右衛門）の顔――

娘方の――へぬりまはした。

しるを附けてゐると、

「南北さん本を貸しなはれ」  
私の手から本を奪ふと、見物を正面に一枚々々めくつて



藏兵川二剣



郎次與し廻猿



元且桐片

「エ、何やこの字……」

地方巡業の時何度もく下の關へ行つたので、もうやるもの

がない。

「切は何にしませう？」

相談に行く

「ダンマリやな」

前代未聞、大切にダンマリをやつた。頭取松右衛門曰く、

「わしも長い事頭取をやつてたが、ダンマリで切口上云ふた

ん初めてや」

片岡仁左衛門の皮肉、片岡仁左衛門の逸話はいくらかもある、

しかし私は又聴や、よそに描いてあるものをお話すまいとした

結果、こんなものになつたに外ならない。

略 歴

仁左老は本名片岡秀太郎、安政四年十月十八日江戸淺草猿若町一丁目に生る。父は八世片岡仁左衛門、安政五年の春中村座に秀太郎と名乗り、先代芝翫に抱かれて初舞臺。明治初年の頃大璃寛に伴はれて土之助(後の十代目)秀太郎が、巡禮姿で角の芝居の舞台に出たのが大阪初出演、明治十年一月中村座に四世我當を襲名。十代目は大阪に來てゐたが、中の芝居(三榮)に出演、その後ずつと道頓堀の花形となり、角の芝居に出演大いに賣出した。明治四十年一月角の芝居で十一代目仁左衛門を名乗り「松ヶ浦島」「石田の局」を出した、四十二年二月には東京明治座に孤軍奮鬪の左團次を後援のため上京し、得意の「大石内藏之助」「廓文章」を出してより彼の地に居据り今日に至る、住所は東京市芝區明舟町である。

當 り 藝

當り藝には片岡十二集の外「櫻時雨」「桐一葉」「名工榊右衛門」等澁い藝風で識られ、また大正十二年十一月中座に於て鴈仁握手劇「沼津」を上場したのは未だ耳新しい事である。東京最後の舞台は昨年六月、歌舞伎座

仁 左 斷 想

西 尾 福 三 郎

一口に名人上手と云ふが、名人と上手は必ずしも同一線上の者ではない。近頃は名人の相場がひどく下落したが上手と稱する人はウヨ／＼してゐる。仁左の死がこの名人相場の下落に又一つの拍車を加へるだらう。

舞台の上で名人に扮して名人らしく見せられたら、その役者も名人に違ひない。黜くとも名人たり得る資格を備へたものと云へやう。その意味で仁左の藝は名人ではない迄も名人畑に近いものであつた。幾ら名人だつて神様でない限り全能と云ふ譯には行かない。時にミスキャストがある。凝つては思案に能はなかつたり、初めから無理を承知で演つた役を、彼一流の解釋で獨特な色揚げにしてみせる。その個性の強さ、潔癖の鋭さが時に愛嬌になつたり、時には煩はしきにも見へる。圓轉滑脱とは凡そ反對に、奇骨に富み皮肉豊かな、それでゐて一面に非常に洒落な所がある。お世辭の云へぬ正直者、信心深くて怒りつばい氣難かしや杯は、表面に表はれた片鱗で、半面には子煩悩で、俠氣で、慾がない。實に温かいものがかくされてゐる。和、敬、清、寂と云つた茶道の四大を誰よりも適度に持つてゐた故

「忠臣講釋」の喜内、大阪は昭和六年中座「新薄雪物語」の上使 勿川兵藏「沼津」の平作。

### 名人仁左の告別

梨園の奇人故片岡仁左衛門の告別式は、去十月廿日午前十時から中寺町薬王寺に於て施行されたが、此日午前九時太左衛門橋北詰の旅舎を喪主我當夫妻、未亡人五百榮愛孫芳子康子及び白井松竹會長始め、片岡我童芦燕、義直、大輔に、市川右團次、嵐徳三郎、中村時藏、阪東壽三郎等の親戚に守られて出棺、梨園の名士及び劇壇關係者、各廓の名妓連等會葬者は蜿蜒長蛇の列をなして宗右衛門町を西行、戎橋を渡つて道頓堀を東へ松屋町を経て中寺町に——道頓堀芝居街では各座従業員のしめやかな送迎があるなど異例な葬送圖を展開、日蓮宗薬王寺では住職堀口日完導師に、市内日蓮宗十六ヶ寺に京都二ヶ寺の各住職の參會、寺内は本堂は勿論境内の隅々まで供花に飾られ、告別式は稀代の名優今は龍法院南秀日顯居士を送るに相應しく盛大を極めた。中でも白井松竹會長の弔詞及び青年歌舞伎時代より舞台では龍虎の覇を競つた大鵬治郎の焼香は會葬者の感慨をそつた。

大松島家十一代目片岡仁左衛門。

京で最後の舞台は延若の三郎兵衛で櫻時雨の灰屋紹由だつた雨に降られて逃げこんだ櫻町の佗住居、上らうとして懐紙を出し草履の鼻緒をそれで掴んで揃へ、その汚れた紙を何うするかと思つてゐると、そのまゝ丸めて袂へ放り込んだ。よいも悪いもこれが仁左好み。十月の歌舞伎座で我當の瀧口が祇王の住居でぬれ縁から手を洗はうとして思案の末、飛石の上へ手拭を落してその上へ片足を乗せて杓をとり、後でその手拭で手を拭く仕草がすつかりこの好みである。

大阪では鵬治郎の重兵衛で沼津の平作と、新薄雪に勿川久馬首を振りくゞ花道から刀箱もつて出てきた久馬の足元の覺つかなき、それが平作ではちやんと格に嵌つた草疲れ足に見へ、物を云つた途端に義齒を落し、口をモグくぐりやり乍ら慌てゝ齒を拾ひ上げた平作であつた事を思ひ出す。以上三役が京阪での最後だつた。

仁左急逝後の歌舞伎座で、我當の瀧口が祇王の庵室で觀經？を誦する場面が聲調共に眞に迫つて、同情と激励の拍手を受けてゐるのはさこそと察しられる。

こゝに敬々しく香を捻じて古き追憶、新なる感懐を述ぶる次第。南無龍法院南秀日顯居士。

# 芝居の手引(3)

## 山川聽雨

### 4. 活歴物

九代目市川團十郎が明治十年過ぎより、従來の時代物の人物の有職故意を正して、扮装し演出することを始めました。假名垣魯文は當時の新聞に彼の此の技藝を評して、活歴と云ふ新しい言葉を與へたのです。これは活きた歴史と云ふことの略語なので御座るます。此の言葉が以來慣用されて芝居語になつたのであります。そして活歴風に演出された舞臺の嚆矢とすべきものは、明治七年七月河原崎座で上演された「新舞臺嚴桶」だと云ふこととす。「春日局」「重盛陳言」「地震加藤」「大森彦七」などその例の一部で、作者は依田學海川尻寶峯、福地櫻痴などが主として活躍致しました。

5. 所作事

これは俗に淨瑠璃或ひは振事と稱して、大切や時には中幕なぞに

### 花柳情話

## 旅の女

### 都築文男

俄然、道頓堀角座に不振の新派復活の機運を兆した我が大成美園は、故瀬戸英一氏作の「江戸紫」を持つて、高松、岡山、姫路と巡業する事になつた。

高松行の連絡船に岡山から二人の婦人が一緒に乗込んだ。

旅のつれづれに一座の視線は此の婦人達に集つた。「何者だらう?」「素人ぢやないね」「一寸いいね」「何れにしても我々の芝居を見に来るよ」

暫しの間、話題はこの二人の事で持切つた。

船は高松に着いた。出迎の劇場関係者、見物の群集山積された荷物、喜多村夫人の叔母に當る人が高松

で某食堂を經營してゐる關係上アーチまで造られて街はまるでお祭騒ぎだつた。

自動車でそれ／＼旅館に落着くと、やがて喜多村氏から使ひが見えたので行つてみると、「江戸紫」に絶對必要な哥澤助六の打合せだつた。岡山から名取さんが二人來て居るとの事で會つた。

岡山から名取さんが二人來て居ると、あの船中の美女だつた。

「一緒に船でしたれ」

「はあ」さ羞しそうに答へる。

「わざわざ岡山からお出で下さつたのですか」

「はい……」やがて助六打合せの爲、彼女は函から三絃を取り出した。やせぎすの美人の腕の冴え、新橋色

の胴掛はいはずと知れた松葉巴の名取紋、撥擲きも鮮やかに調子を合す、

「では、一つ」

彼女の唄つたのは三くだり半の寅派だ、芝派の長い助六とは餘りにも縁遠いので喜多村氏と私とも思はず顔を見合せた。

芝派と寅派、哥澤の祖は隆達の別れて初代太夫芝金は柴田某と云ひ旗本の出、寅右衛門はその三弦を弾いた江戸生粹の職人肌、その流れが別れて二派となつたのである。

彼女達は何も知らず唯岡山の座主から頼まれてきたのだし、今更岡山へ歸して代りを物色すると云つても明日に迫る初日だし全く途方に呉れた。

窮餘の一策、寅派の助六に辻君、薄葉を三つ並べて大膳をお茶を濁すとしても三幕目で廓の誠(心でとめてかへす夜は)のくだりは

演ずる舞踊劇を指して云ふのでありませう。古いものでは、河東・富本・清元・常盤津・長唄等を用ひますが、新作の多くは、長唄・常盤津に限られてゐる様であります。「娘道成寺」「六歌仙」「辰橋」「身替座禪」などは新曲に屬します。以上でお芝居の種別に就いて簡単に述べ来りましたが、次いでに狂言の列べ方に就いて申し上げますと一番目は時代物が義太夫物、二番目が世話物、之に中幕として荒事か又は華かな狂言を挿み、二番目の次ぎには大喜利と名付けて所作事を添へる——これが番組編成の常識となつてゐるので御座るますが現在では第一、第二、第三と呼ばれて排列される方が多い様です。しかし、歌舞伎は矢張り、一番目二番目と肩書きされてゐる方が、よく似合ひますし、親しみも持てる様で御座ります。

(此の項終り)



絶対に變更の出来ない當はまつた歌詞なのだ。兎に角表方や頭取と協議の結果、高松の藝妓の中から物色する事にした。やつと見付かつた藝妓が、それがまた餘りにも物にならな

い。自分がなまじつか哥澤の心得が有る丈に責任を帯びて、旅館に其の高松藝妓を伴ひ、稽古を始める事にした。

三度、五度六度、遂に廿數回の「心をとめて……」の稽古に隣室に就寝してゐた船酔ひのまだ醒めやらぬ木下吉之助氏でさへ節を覺えた位、猛練習をした。

明朝九時にもう一度の稽古を約束してその藝妓は歸つて行つた。

翌日、正午過ぎて開幕が接近してゐるのに藝妓は姿を見せない。幕を開けてもまだ來ない。

い。いよ／＼気が氣ぢやない。表方を走らしたが屋形に居ない、檢番から出先の青樓を訊れると、客か？情夫か？役者のかげ唄に出ると云ふ嫉妬からか？散々に飲まされて、ロレッツも廻らぬほどに酔ひ倒れて居ると云ふので、どうにもならな

い。二幕目の幕切れのキザミの音は責任のある自分の胸にひし／＼と喰ひ込む、愈々三幕目だ、五分！三分！幕を開けなきやならない、絶對絶命だ。

折も折も、部屋を訪れた婦人客があつた。「あつ、天の助け——(ア—メン)」思はず心の中で叫んだ。

婦人客は僕の頓狂な態度に呆然としてゐた。拜み倒しの一手で無理無體、囃子部屋へ連れ込んで三幕目を無事に終演した。

この婦人こそ中京美人で哥澤芝花久さんと云ひ曾て新守座で出演して貰つた経験のある人で御主人同伴金比羅詣りの歸途、辻ピラを見て、觀劇に來られたのだつた。

これで全く金比羅様のお守護に違ひない。南無金比羅大権現、あなかしこ。

喜多村氏は「よかつたね、器用なもんだ、流石に商賣人だよ、一晩の稽古ですつかり細かい節まで覺えたもんだね、お蔭で舞臺も氣持よく出来たよ」と賞讃措く處なし。苦しんだ事も知らないで「僕は思はず苦笑した。

一九三四、一〇

# 賢外集

(現代語版) (下)

## 大橋孝一郎譯述

○ 當時關西の坂田藤十郎と並び稱される江戸方の和事の上手と申せば、中村七三郎で御座いました。元祿十年霜月のこと、京の山下座へ乗込むで華々しく打つて出たの

でしたが、藤十郎方の満員續きに引競べて、どうしたのか眞に不評判で御座りました。藤十郎の周囲の人々は「京には坂田藤十郎と云ふ和事の名人がひかへて居るにも拘らず、はる／＼江戸から登つてまで和事を見せるとは實以つて了見違ひな横着さだ」

と、七三郎を口々に誹つたので御座います。しかし、只一人藤十郎のみは皆のこの言葉を斥ぞけて申すには「成る程下手だ。しかし、七三郎さんが決して下手なものではない。七三郎さんの藝を御覧になる京のお客様方の觀賞が下手なのです。七三郎さんは到底私如きの及びも付かない大の上手。この方の上に立つ役者は一寸見當りますまい。私も七三郎さんを見習つ

て藝を磨けば、今年中には、少しでも私の藝が上達することだと思つて喜んでゐます。今の狂言は不入りでお困りの様子だが、二の替りは屹度大入續きたと私は今から信じます」

と周囲の人々に話して居りましたが、果せる哉。藤十郎の言葉は見事的中致しまして、翌正月二十二日からの二の替り狂言「傾城淺間獄」に七三郎の扮するともえの返の色役は、外に眞似手のない大名人との評判で、京の町は大騒ぎ。七三郎をあざけり誹つた人々は今更大恥をかいた様な譯ですが、同時に先見の眼力のあつた藤十郎の言葉を思ひ浮べて、

「流行に上手なお方の観方はまた別なものだ」  
と一同感じ入つた様な始末で御座りました。

藤十郎も更めて金子吉左衛門をひそかに招き、今年七三郎と云ふ競争相手があるから中々油断が出来ない、狂言も一層骨を折る必要があるなど、色々と打合を致

されました。

又、狂言の替る毎に、藤十郎は七三郎の舞台を見物しては「天晴れ上手なお人だ」と譽め、七三郎もまた藤十郎の藝を見ては「聞きしに優る名優だ」と賞讃し、お互ひにはげみ合ひ、藝道に精進したと云ふのは眞に奥床しいことでは御座いませぬか。

やがて七三郎の江戸に引上げる時が参りましたので、彼は心からの置土産を持つて藤十郎のもとへ暇を述べに参りました。藤十郎も何か送り物をしやうとは思ひましたが、もらつて直ぐに返す様では甚だ面白くないので、其の場は其の儘に打捨て、置いたので御座ります。

そして、その年の暮二十九日の事で御座りました。江戸の七三郎の宅へ坂田藤十郎から大きな壺が六人の人の手に運ばれて到着したのです。七三郎は、一體何を送つて来たのであらうかと驚き、添へてありました書面を緋きますと、

『加茂川の水一壺こん上仕候、大ぶくに御遣ひ被下べく……』  
云々としたゝめて御座りましたので、七三郎は、

「藤十郎さんには京都で御目に懸り、その人物もよく判つてゐる様に思つてゐるたが此の送り物で、藤十郎さんの心の底は實に計り知れないものがある」と人々に語り傳へたと云ふことで御座ります。

山下京右衛門は、芝居の台詞の内には、随分とさし合がましい事があるが、そう云ふ台詞はお互ひに注意する様に、と若い役者衆へ申し渡されました。何しろ親子兄弟揃ひで見物にいらつしやる處ですから、尤もなことで御座ります。

坂田藤十郎申しますするには、歌舞伎俳優は、人様の御氣嫌取りに勤める様では決して良い役者になれるものではないし、又藝も上達はしない。……と、これは役者を藝術家の高さに迄引上げ様とした彼の名訓です。

續けて申します……人様の御氣嫌取りばかりに心をうつして居ると、役者同志の氣持やつきあひ迄も甚だ疎遠になるものであると何時も若い者どもに教訓されてゐたので御座ります。

(終)

お笑ひ  
顔見世  
軟扇子  
間張交

竿竹  
珍阿彌

前  
第一……東西都懸持

夫 實川延若  
その妻 中村魁車  
その子 實川延二郎  
同 實川延之助

舞台金襴の御殿建り、上手に只一人  
延若が殿様然と坐つてゐる。

淨川「さる程に大阪方の御大将實川河  
内守。東へ下る日も明日。可愛  
い」としの女房子に、又暫らく  
は逢はれぬかと、思へば流石に  
男泣き、しばし伏せりてゐたり  
しが

延若「いや、いや、いや。此の身は大

事な御客様方の體も同然。何しに  
女房子供などにかまつてはおられ  
やうぞ……とは申せ……」

淨川「未だいたいけなる二人の子を、  
残して旅立つ親心。」

延若「シ、シ、辛抱致して呉れよう……」

淨川「この時、妻の新駒は、十になる  
やならずの二人の子、延二郎と  
延之助を双に抱きよせ立出でた  
り。」

延二郎「父上様」  
延之助「明日はもう」  
二人「お立ちかへ」

延若「お、關東方のおすゝめに甘へ、

明日からはまた江戸の芝居。これ  
も日々皆様のお力添へがあればこ  
そ、家のことに氣を取られて居つ  
ては相濟まぬ次第。この道理を  
くみ分けて、暫しの辛抱致して呉  
れよ。」

淨川と云へば名のある家の子等  
延二郎「そんなら母上とおとなしう待  
つて居る程に、おみやげを頼みま  
すぞへ。」

新駒「ホホ、、、、お、よいとも  
よいとも。おとなしうさへ待つて  
いやれば、父上はキツと、よいお  
みやげを買つて来て下さるぞく。」  
淨川と思はず見合はす我が夫の顔。



さつきと變り氣も晴れ晴れ。  
延若「フフ、ハハ、フハハハ、、、、  
よい子ぢや。よい子ぢや。」

新駒「したが申し、私の分も忘れずに  
頼みましたぞへ。」

延若「ハハ、、、、よいともよいと  
も。」

新駒「どうやら後がたよりない。決し  
て浮氣は」

延若「エ、木の頭」

新駒「ゆるしませぬぞえ！」（幕）

—— 第二……二人は洒落る ——

女優 水谷八重子  
男優 澤村田之助  
男優 阪東しうか

或る劇場の樂屋。

田之助「八重子さんにしうか君に僕。

とこんな顔ぶれで大阪で芝居を打  
つなんて、全く珍らしいことだ  
ね。」

しうか「僕も大阪の方はトント御無沙  
汰してゐたんでこんどの舞台は嬉  
しいよ。」

八重子「私も田之助さんや、しうかさ  
んの様な腕も立つし、男前もい  
お方に扱まれてほんとに嬉しいで  
すわ。」

しうか「八重子さんは相變らず、お口  
がうまいからなア……」

三人「ハハ、、、」

田之助「しかし、八重子さんも大阪は  
一寸暫らく振りでしたね。」

八重子「エ、」

田之助「ハハ——ン。だから「月より  
の使者」なんて出したのだな。こ  
れじやア相當ひまの懸る筈だよ。」

八重子「田之助さんは本當にお洒落が  
お上手ですわ。」

しうか「だが、八重子さん。こんどの  
芝居中で貴方はウツカリ休めませ

# ・花柳病科・

皮膚科・性病科

## 藤原醫院

町入 番西 五辻筋 地南橋 新二側 波停座 難電伎 區橋舞 南戎歌

んゾ。」

八重子「まあ何故ですの。」

しうか「何故つて、ウツカリ休みでも

しやうものなら、八重子さんには

近頃「月よりの使者」が来てゐる

んだゾツ、と云はれますからねエ

……ハツハツハツハ……」

八重子さん暫らくその意味を

考へてゐたが、ヤツと感付い

たらしく

八重子「まア……失禮ツ！」

と立上る。田之助としかうか兩

君、現場危しとみて取つて樂

屋から逃げ出す。この景よろ

しく (幕)

第三……肥えたい羽左

關取 阪東彦三郎

その妻 澤村宗十郎

弟子に 助高屋高助

弟子に 尾上菊五郎

肥えたい 市村羽左衛門

或る關取の住居。いつもの處に格子

戸。助高屋高助来る。

高助「二寸御免下さいませ」

×「アイ、アイ」

と譬して、關取女房紀の顔出

る。

紀國「誰でござんすえ」

高助「へい、貴女様の御親類筋に當つ

て居ります助高屋高助めに御座

ります。」

紀國「まアお珍らしい高助さん。さあ

こちらへ上つて下さい」

と案内する。

高助「實は今日參上致しましたのは、

私のかねての願ひ、是非立派なお

角力にして頂きたいと、親方様へ

お願ひに參りました様な譯で御座

ります。何卒貴女様からも、よ

ろしくお頼み申して下さいませ。」

繁華街に近く・交通至便・閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

# 南地ホテル

南波難海戎地新前停橋

電南四一四・四四一番

— 宿 —  
~~~~~  
— 半圓 —  
~~~~~  
— 圓 —  
~~~~~  
額半

紀國「高助さん、よく判りましたなれどお角力になるのには、並大抵の苦勞ではありません。お前さんそれ承知かへ。」

高助「へいへい、百も二百も承知の上……。」

紀國「では、私から頼んで上げませう。」

高助「よろしうお願ひ致します。」

紀國「一寸待つて居て下さんせや。」

と女房へ入る。間。關取彦三郎出る。

高助「コレハ、コレハ親方様、初めてお目に懸ります。何卒よろしうお願ひ申します。」

彦三郎「いや、委細は今女房から皆聞いた。女房の親類筋とあるからは嫌とは云はれぬ。今日からワシの弟子にしてやるゾ。」

高助「有難う御座ります。」

と嬉し泣きに泣く。

彦三郎「サア、直ぐに稽古じや。奥へこい。」

高助「へい、有難う御座ります。」

と二人入る。花道より、菊五郎、羽左来る。遊人の風體。

菊五郎「オイ、兄イ、こう世の中が不景氣じやしやうがねエなア……。」

羽左「そうよ。しかし、不景氣不景氣云ひ乍ら、おめエ、いくらでも肥えるじやアねエか。變な野郎だなア。」

菊五郎「そんなに云ふなよ。俺アおめエに隠れて何か甘いものでも食つてゐる様に思はれるじやねエか。」

羽左「俺ア江戸ッ兒だ。そんなケチな考へは持つてゐやしねエよ。安心しねえ。」

菊五郎「處で、一寸考へたんだが、不景氣で食へねエし、體は肥えてる

んで、一そうお角力にでもならうかと思つてゐるんだ。」

羽左「そりやいゝ考へだ。そうしねエ。……おツ、こゝは彦三郎

關の家だぜ、豪勢なもんだなア……。」

菊五郎「心配するねエ。俺も今に見ろもつともつと立派に肥えて、強くなつてやるんだ。」

羽左急にグーツと洗んで……間……

羽左「こうなるてエと、この俺も、あ——あもう少しでいゝから何とかして肥えてエものだなア……。せめて五キロでいゝよ。」

とうそむく……  
菊五郎「わびしいこと云ふなよ。」  
となだめる。

靜かに (幕)

# 水谷八重子の藝と人氣

菱 田 正 男

霜月の大阪歌舞座へ、暫らくぶりで水谷八重子一座が来る、そして大阪の阪東壽三郎と初顔合せをするさうだ。顔振れも水谷のほかは、田之助小太夫、しうか、伊井、大東嘉久子などがある。狂言も東京で好評だつた岡本綺堂氏の『鎌』や、川村花菱氏の『水車の唄』坪内博士の『お夏狂亂』久米正雄氏の『月よりの使者』などを上演するさうだ井上正夫の居らぬのは、いつもの水谷らの顔觸れから一抹の淋しさを感じるが、それだけに若い人々の濺刺たる舞臺が見られるのでいゝ。

◇ 水谷八重子も近來ますく巧味を増して來た、この前『お夏清十郎』や『酒中日記』を見て、更にその感じを深うした。恐らく現在の舞台女優で、この人ほど人氣があり、この人ほど巧い女優は少なからうといつても過褒ぢやあるまいと思ふ、こんどの『お夏狂亂』にしても、坪内博士がこれまでは梅幸のものだつたが、これからは水谷のものとならうと折紙をつけたといふのも、彼女の藝の進歩を立派に證してゐる。舞台女優の藝は、ある範圍に限られ、やは

り女形がまだく萬能の今日の劇界に、彼女の存在は大いに力強いものがある。曾て新派にあつて花柳とのよきコンビを謳はれ、あるひは井上正夫と一座にあつて『上陸第一歩』『酒中日記』『大尉の娘』にそれくガツシリ組んだいづれ劣らぬ好演技を見せたが、前者は新派との感情問題？からか、正面衝突をしたと傳へられ、爾來花柳との合は、井上との夫婦役も年かから來る無理があり、親子役はあまりに毎度で鼻につく——との譏が出てゐるが、その毀

譽褒貶は各自の判断任せとしても、事實メキメキと腕の上達したことは何人も否めぬ事であらう。天性の美貌と、天才的好演技、撓まぬ精進が、今日の彼女の盛名を贏ち得たものといふべく、更に將來への努力を祈つて止まない。

◇ 彼女の人氣のすばらしいことは、いづどこで興行しても明らかな事實だ、就中京都における彼女の人氣は他の劇團を完全に壓倒してゐる。昨年秋、京都南座に『お夏清十郎』『女優と詩人』『酒中日記』などをもつて來た時の連日超満員のレコードは、彼女の人氣を雄辯に物語つてをり、その後大阪歌舞伎座で『魚河岸の朝』や『椿姫』をやつた時の大入などは、他の劇團の羨望

に堪えぬところだつたらう。

ある人が自分に『近頃東京新派は花柳中心で賣り出してゐるが、も一つ芳しい成績のあがらぬのは、狂言が古かつたり、役者がどうこういふのではない、あれは水谷が居ないからだ』といったことがあるこれは随分東京新派を侮辱した言葉だが、一面水谷をこの上もなく賞揚支持するものだから私はこの言はその人の水谷禮讚から來たものと思つてゐるので、大して問題にはしてゐないが、こんなに噓し立てられるほど彼女の人氣は相當なものである。



私は可成り水谷の頼まれもせぬ提燈を持つたわけだが、最後に云つておきたいことは水谷自身この好評に、ファン

の支持に甘んじて、かりそめにも劇界の女王然と驕り納つてゐては絶対いけない。

『彼女は芝居は巧いが、舞台以外では横柄だ』とか『人氣

があるので威張つてゐる』とかいふ評を時折耳にする、これはデマだらうが、彼女のたぬに惜しむ。同時に自分の出來る腕に任せて、何でもやるのはいゝが、結局自然的に限られたる藝の範圍を越えてはならないと思ふ。(九、十、廿九)

## 十月劇壇見聞

西尾福三郎

久し振りで歸阪した文樂座の全員が、由縁深い竹本の芝居小屋で元祖義太夫の追善記念興行を舉行した。

表飾り内飾り、一枚刷りの番附から、演し物の吟味振りに到る迄萬事大凝りの設備は近頃結構な企てであつた。殊

に一番目世繼會我の古風な演出振り杯、近頃やゝもすれば人形許りに重きを置いて、文

樂を讚美しやうとする素人の見物衆に、聴く文樂としての太夫の地位を、昔乍らの正當に示したものである。この上の慾には、堀川のお猿に見るやうな一人使ひの古拙な人形であつたら尙よかつた。

理屈を離れて面白かつたのは玉藻前のお狐さん、變幻出没の妙、古風なグロテスクとスリリングが獨特の味を出し

てゐた。これは人形芝居だけが持つ特殊な價値で、稀にはかうしたケレン物で、目の見物を喜ばせる事も必要であらう。高級ファンや定連だけを守つてゐては間口が狭くなる許りだ。新しい見物層開拓の爲には、定期的な道頓堀進出と共に、演し物にも風變りな味を盛る事を忘れてはならぬ衣裳や道具に變な生々しさが

あつて幻想を妨げた事は遺憾だが、これは云つても詮方がない。

よかつたのは古鞆の堀川で與次郎を生かせる人はお俊に難があり、お俊をやれる人は與次郎が喰ひ足らぬと云つた。昨今、この度の堀川こそ推しなべてむらのない、凡そ結構な物であつたと云ふに憚らぬ惜しいのは合三味線の清六が病氣の爲代役で間に合はせた事だ。そりや聞こへません○  
○さん。

津太夫の碁盤は大力演、さり乍ら息の長い物で四つに組んで、正面からザリ／＼と押しきつて行くやうなこの人の藝風にはやゝこれでは物足らぬ位、時間と云ひ内容と云ひ稀薄であつた事を否めない。

◇

歌舞伎座の方は吉右衛門病氣にゴタついたが始まりで、續いて仁左衛門の死で、淋しい口上場が一層の淋しさを加へた。その中でお家の爲と許り我童一人が大奮闘、ひとし改め芦燕も晝夜の二役共上乘の出来である。

一番目清盛人道の出現から瀧口入道と佛御前の別れ迄坊さんづくめ。祇主も祇女も佛御前迄が髪をきるのだから凄まじい。と云へばそりやその筈さ、女主人公が佛御前だから。

一番目に負けまいと、夜の大切では、長老田圃の源さんから、維僧河内屋の延ちやん兄弟迄、カツボレ／＼で圓頂オンパレード。將に宗教復興風災犠牲者慰靈の秋と云つたシーン風景。おつと外にも

まだ坊さんがあつた、どれ何處に？。すしやで梶原から貰つた陣羽織の中にあつた袈裟と珠數、あれで維盛卿が坊さんになつたとさ。そんならお里も尼さんになるのかいな、それは知らんが、尼さんになる人なら外にもう一人あつた。知つてゐる、佛御前だらう。いゝえ、ひばり山へ行つた中将姫。なる程。

◇

十數年振りで鴈治郎の菅公が出た。晝の部での呼物となつてゐる。雷電はためき暴風吹き荒む大阪浪速津曾根のあたり、この物凄い光景の眞最中、次は愈々高潮が来る番やとは見物の一人が思はず洩らした恐怖の嘆聲。

暴風雨が静まつて菅公がしんす／＼と家から出てくると

見物席からバチ／＼と手が鳴る。喝采にしては割に遠慮した物だと思つてゐると、又向ふでもバチ／＼と二度。よく見ると拍手には違ひないが、天神様にかしわ手を打つて拜んでゐるのであつた。將に鴈の技藝神に入るの靈證か所でその人にお賽錢を上げないのかときくと、お賽錢なら木戸口で五圓五十錢上げてきた。とはまさか。

その菅公、以前は黒い牛の脊に乗つて、その鼻面控へて揚幕に入るのだが、今度は河内屋の坊ん／＼をうまく脇侍に使つて、情味の深い引つ込みを見せてゐる。牛を馬ならぬ子供に見代へられた道具部屋黒牛、十何年の倉庫暮しにつく／＼不遇を嘆じて曰くウシと見し世ぞ今は戀しき。

千本櫻すしやの幕切れ、鷹の權太が斷末魔、散ばら髪になつて一子善太の巾着を握りしめ乍ら、源之助の母親の肩に凭れかゝつて落入る。市藏の父親宗十郎のお里もオロオロ泣き。と、いよう二百七十八年と云ふ聲がかゝる。何の事やら、作者出雲の年忌なら二百年、竹本義太夫なら二百五十年……と考へてゐる内に分つた。この長老四人の年齢を合した数が二百七十と八年になる譯だ。一番長老が源さんの七十六歳、一番若いお里の宗十郎が何と六十歳、その外は云はぬ事。

の案内で、松竹白井會長招待の浪花座人形淨瑠璃に臨んだが、上場狂言世繼會我觀劇後少憩を利して白井會長はじめ一座の紋十郎から人形の動き等について説明を聴き打ち興じた。さすが一流ジャーナリストだけ、その鋭い觀察と質問に豫定時間より延び、一同大喜びだった。

常盤津

つくばね會  
第二回公演

常盤津若手連の勉強會第二回は十月二十九日、午後六時より日本橋北詰ブラジル會館で開催され非常な盛會だった。

× × ×  
× × ×  
× × ×

國際風景

米國記者團一行  
淨瑠璃人形で  
大喜び

アメリカ新聞記者團一行は十月十九日午後三時日本新聞協會諸氏

PEACE SYRUP

ピースロ-ゼ-ツ

Kyoto manni Co.

# 月よりの使者

十五幕  
十一場

## 五幕十一場

見たまゝ

野々口道子は戀人北原を肺病の爲に奪はれてから、幸福なる可き令嬢生活を捨て去つて、寂しい高原の肺療養所に美しい白衣の天使として、尼僧のやうに清淨な生活を送つてゐるのでした。彼女が一生を捧げんと決心の下に働く療養所。それは八ヶ嶽を負ふ信州富士見高原の、淺木博士經營のサナトリウムでした。

此の病棟に、颯れ行く青春を歎いてゐる若い人々の間では、道子の存在はまるで此の高原の草はらに咲く一輪の龍膽のやうに、此の

世に残された只一つの慰めであり憧れてありました。中でも橋田、戸塚、弘田の三人は殊に熱心な彼女の讃仰者で、神經質な橋田は病ひに對する絶望から、殆んど自棄的に結婚を迫るのでした。戸塚も彼女に對する戀に悶えてゐるのでしたが、其苦をまぎらさんが爲に殊更におどけた様を装ひ、そして却て弘田の道子に寄せる戀を、成就せしめやうと計つてゐるのでした。

扱、弘田ですが、彼に弓子と云ふ許婚があつたのです。が、彼が

今病氣にかゝつた事が分るや、弓子の實家では二人の仲を隔てゝつたのです。然しあくまで許婚弓子の愛を信じてゐた弘田、きつと彼女は總てのものを振り捨て、も自分の許にかけつけて看護に盡して呉れるであらうと、待ち望んでゐたのでした。それは彼の空だのみでした。弓子の實家ではとう／＼婚約まで破棄したのでした。

彼は此の時こみ上げて來る悲憤と共に「畜生、そんな事なら、此方から進んで向ふを辭退して、斷つてやる。そしてどうかして再びよくなつて、あんなブルジョアの娘でなしに、何所からか真に清い、此の病氣に同情と理解のある立派な女を貰つて、幸福に暮して見せる——」と決心したのでした。此時、彼の前に現はれたのが白衣の天使野々口道子でした。弘田はそ

うした心の傷手から、急角度に道子に亦心を引かれて行つたのです。が、道子も亦弘田を心に深く秘める身となつてゐるのでした。道子

に戀を寄せるのは單に右の人達だけでは有りません。此の療養所のレントゲン科に勤める若い醫師池内。彼も亦熱烈な求愛者の一人でした。

然し道子の心はひたむきに弘田へと向つてゐるのでした。

此のやうな只一人の野々口道子に對して戀の競争がいろ／＼の形で描かれつゝある療養所内の男性の中、一人其圏外に立つてこれに眺めながらも、弘田と道子との戀に幸あれと熱望してゐるのは内村さ云ふ人物でした。

弘田と道子。——二人の戀は内村、戸塚の親切に依つて加速度に進展するのでしたが、一日突如として弘田の許婚弓子が弘田の妹婿子と共に訪れて來た事に依つて、弘田は道子を説きふせて、遂に二人は其夜此の病院を脱け出る手筈を決め、弘田は一人先に諏訪に向けて發つたのでした。然し運命は慘酷です。其夜道子への永遠を唱へた遺書を殘した橋田が、劇薬自



殺を遂げたのでした。そしてせめて其一夜、亡き人の屍を見守ることが道子に残された唯一人の手向の道でした。而も弘田は既に病院を脱け出てゐるのでした。道子は全く進退に迷ふと共に自分を懸しながら自ら果てた橋田の事なぞを思ふ時、泌々自分ばなんと云ふ罪障深い女であらうと考へさせられるのでした。そして自分は到底あの弘田と結婚なんぞ出来る身分ではないのだ。自分は色々な罪の償

ひの爲に、一生尼のやうな心持で此の職務に従はなければならぬのだ……と決心するのでした。此處に弘田との結婚を悲しく斷念した道子は、弘田が自分を待つ事になつてゐる諏訪の宿を弘田の妹に教え、道子は此まゝ病院からも弘田からも永久に去る可く決心したのでした。

トリアムに於て相變らず白衣の天使として働いてゐるのでした。と、ある日の事、鎌倉のある家から急に咯血した者があるからと其家に派出される事になりました。その患者……病める若い夫人。——それは思ひもよらぬ弓子だつたのです。弓子の現在は云ふまでもなく弘田夫人です。

とつては勿論限らない喜びだつたのです。道子は此の弘田の愛の復活を力の限り防がうと努めました。殊に既に死を豫知してゐる弓子夫人の口から、心あつてかなくてか泌々して、自分は嘗つて弘田と縁を絶ちながら、再びかうして夫婦となる事が出来たが、夫弘田には確に富士見高原時代から戀人があつたらしい。云はゞ自分は自分一人の望みを達せんが爲めに、夫と其愛人との戀を踏みぢつた

歌 舞 伎 座 十 一 月 興 行

上 演 脚 本 抜 萃 (2)

福 澤

こいつらおれをうしろから斬りつけ様としたのだ

彦次郎

(中に入りて) 先生、どうしたんです、伯母さんが大層心配してゐられます。

福 澤

(意外の言葉に) 何。

男づくの争ひに、町役人に渡すとは何んだ、卑怯ぢやないか。

卑怯ともくこんな無茶な奴があるか、日本の武士道と云ふ奴に自分だけが刀を持つてゐると云ふことが恥ぢさせなければならぬ。刀が勝つと、人間が勝つと、その區別がある、ことを知らさなければならぬ、町役人を探せ、役人を呼べ。

彦次郎

(朝吹に) 君、どうしたんだい。

獄卒の手にかはらんぞ殺してくれ。

福 澤

獄卒だ——？

鐵之助

男づくに解決しろ。

福 澤

こいつ不思議なことを云ふ奴だ。(次第に冷静に返り吹出したい氣持にな

ことになる。今自分がかうして病に犯されたのは罰だと思つてゐる。と……云はれては、益々弘田の愛に燃える眼を怖れねばならないのでしたが、一夜道子は戀の力にうちまかされ、弘田と鎌倉の濱邊に隠れ逢つたのでした。然して其留守の間に弓子夫人は、青酸劇里を呑んで、淋しくも永久の眠りについてゐたのでした。遺書も何もなく……

道子に對して運命の神は何處まで慘酷なのでせうか……。弓子自殺と同時に前島家からの迎えを受けて駆けつけた醫師は、富士見のサナトリウム時代に矢張り熱烈なる道子讃仰者の一人であつた池内醫師でした。

池内は其所に戀する道子と、弘田の居るのを見て、戀の破れた彼の頭には嫉妬と共に復讐の念が起つて來るのでした。彼の口から出される言葉は、一言一句檢視の聲官達の耳に、弓子の變死は他殺であつて、其加害者は弘田と道子で

あると云ふ風に聞かれるのでした。殊に道子は普て高原に於て橋田が自殺した時、せめてもの記念として彼が自殺に用ひた青酸加里の瓶を持つてゐましたが、其等の事情から當然嫌疑は道子の上に落るのでした。

總てを諦めきつてゐる道子は、従容として引かれ行くのでしたが彼女は悲しかつたのです。彼女は弓子を殺したのは弘田だと思つてゐたのでした。自分の爲めに殺人まで犯した弘田の愛に對しては彼女はその身代りとなつて報ゆるのが、當然弘田に對する自分のつこめであると思つたのでした。

X X X

未決にながれてからの彼女はたゞ裁きを待つのみでした。然しその潔白を信じきつてゐる人々は、あくまで彼女の爲に無罪を主張して、一日、早、彼女が放たれるやう東奔西走してゐるのでした。それは内村と戸塚でしたが、彼等の努力も遂に報ひられる時が

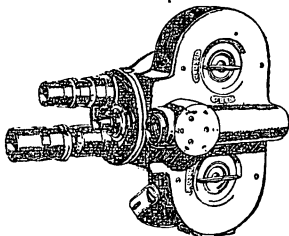
來ました。と云ふのは弘田の妹晴子の登場に依つてです。晴子は其夫なる人と印度に行つてゐたのですが、或日義姉弓子から、嘗て彼女が欲しがつてゐた人形が送つて寄こされたのです。處がそれには「この人形がつく頃はきつと私は二度とかへらぬ眠りについてゐるでせう……」と記された遺書が

つけられてあつたと云ふのです。かうした證據が出た以上、道子の潔白な事實です。戸塚、内村の命を受けた辯護士の手によつて此の遺囑は法官の前に出されました。これで總ては解決されたのでした。今や全く晴天白日の身となつた道子は弘田の温い胸にかへるのでした。

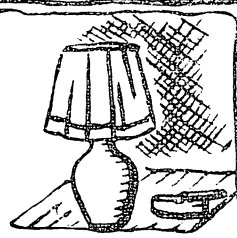
# フィルム

## 十六ミリ界の 最峰高

未だ會てフィルムカメラで一呎のフィルムが浪費されたか？フィルムは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ賞下のなされる事は唯それだけだ



(早進グロタカリあに店ラメカ流一國全)  
BELL & HOWELL CO. U. S. A



# 新批評家集

葛原康好  
川上利一郎

## 水谷八重子に贈る

葛原康好

X X X

水谷さん  
透々道頓堀へやつて来ましたね、  
定宿の様にしておいた寶塚から道頓  
堀への轉向は結構ですまことに。  
寶塚で盛んに發展されてゐた貴女  
が、急に今度の歌舞伎座進出、一  
體何が貴女をしからしめたか、そ  
こには貴女の押へがたいはちきれ  
るばかりの野心を見る事が出来ま  
す、御遠慮には及びません、ごし

ごし貴女の精力のあるつたけを揮  
つて大にに熱演して頂きたいです  
初め貴女は井上正夫氏の出演を渴  
望しておられたそうですが、貴女  
の御心情拜察して誠にあまりある  
ものがあります、事實、貴女の演  
技は井上氏あつて初めてその本来  
の眞價を發揮し得たと言ふべきで  
したから、恩師として又井上氏は  
貴女にとつては忘却し得ざる人で  
す、井上氏の來演は貴女丈でなく

我々にとつても又希望するところ  
ですが、先に東京新派の關西來演  
で十分氏の快技を満喫した直後で  
す、そうくは我々の意に叶ふべ  
くもないところせう。

ところで、

貴女が統帥たる藝術座の一團、あ  
れが醸し出す雰囲気如何に今迄  
貴女の眞の聲價を傷つけてゐたか  
あまりにもそれは貴女にとつて有  
害無益の(ちと大げさになりまし  
たかれ)存在でしたよ、もとより  
貴女にとつては、單なる稽古場の  
様なものか或ひは手ならしのつも  
りだつたかもしれないが、藝術座  
での貴女とフリーとしての貴女と

には、常々我々は別人の様な相違  
を感じてゐたものです、勿論、フ  
リーに於ける貴女は、本當に藝術  
的良心に燃へる眞摯な藝術家とし  
て多分にその熱意が覗はれたから  
です。

貴女が藝術座を引きつれて寶塚へ  
來て堂々と公演をなさる、しかも  
新聞には何とか化粧品(貴女の守  
神であるかの様な)との物凄いタ  
イアツプ付きで。もつとも之は何  
時その化粧品の名ばかりやけに  
目ざわりになつて、ちつとも貴女  
の存在がわからぬといふ妙なも  
のでしたが、そして、そこに見る貴  
女は、技を誇る一個のタインでし

かなかつたとは、正直なところ悲しむべき事實なのでした。

今更書きたてるのも大人氣ない様なものですが、井上氏とのコンビによる貴女の存在こそ本當の水谷八重子としての意義が見出されるのです、藝術座は貴女にとつては悪趣味ですや全くのところ。

水谷さん

貴女は舊作「天晴ウオング」で雪洲を向ふに廻してのあのファンニ一の役柄の様な素晴らしい明朗さがあるんです、我々はむしろ貴女が一本立ちで單身ごこにでも飛び込んで行つて、貴女自身の技を投げ出して思ふ存分活躍してほしいのです。名題なんでもは有名無實なものです、何も一處にガツと治つてゐなければならぬ事はないでせう。

だが貴女は何だか自ら大成してしまつた様な悪く言へば早老してしまつた様なところをあなた自身の周囲から感得するのは、何といつ

ても残念な事だと思ふのです。

あなたの藝術に本當の磨きがかけられるのは愈々これからだと思ふのに、とたんに出鼻を折られてしまつては、我々にはもはや何の興味も感じなくなつてしまふ、不快な早熟児を見る様な、そこには輕視の眼が、唯々魂のゆけた美しさのみを追ふ浮薄な眼が、貴女の足元に吸ひつけられる丈でせう。

第二の松井須磨子たらんとする貴女の燃へる様な藝術的野心は時にはこちらで降参したくなる時もあります、だが心ならずも早老を今して貰つては定めし、あなたの爲にそれこそ何千の男がまづ泣く事です、自重して下さい。

水谷さん

ところで今度の阪東壽三郎丈、もとより貴女にとつて不足はない筈です。

關西での將來共、左團次級を行く役者を強いて求めるなら先づ目下

のところこの人を持つて來なければならぬでせう、其他今度の顔合せは實に貴女の藝術欲をいやが上にもそゝる好プレーヤーばかりではありませんか。

東京若手を初め未來の藝壇友三郎一度にそう欲ばるものではありません、加之、女優群には、それぞれ油斷の出來ないキケ物ばかりときては貴女だつて落つていて實際にばかりは色氣をみせてをれないでせう。

水車の唄はすでに東京で猿之助を向ふにまわしての試験済み、恐らく貴女の頭上には歡呼の嵐が立つ事です。最早大きな期待が貴女の周囲に十重二十重かなへる如くにかけられてゐます。

月よりの使者はこれは問題ではないでせう。たい入江たか子から貴女へ、丁座映畫は月よりの使者に於ける入江たか子を貴女に入れば、それで十分です。満都の子女の紅涙をしばらく絶讚

つきのもの、貴女は安心して演れるかもしれないでせうが、この芝居をもつて來たのは、あまり感心したものではありませんね。一體今度の歌舞伎座公演を觀にくる客筋はどんなものかと思はれますか

貴女は、もつと氣のきいた新鮮味を多分に含んだものがすぐ手ちかにあつた筈ですがね。が、まあそれも好いです。たい此上は、あくまで眞實味に富んだ親しみ易い月よりの使者であつてほしいです、けだかい美しさはまだ辛抱が出來ますが、まるで女王の様な月よりの使者は眞平御免にお願ひしておきます。今度の顔合せが一の轉機になつて、貴女の將來を左右する事になる運命の橋渡しと、なる事と思ひますが、ところで――

水谷さん、劇界に於ける目下の女優陣は、漸く古きより新しきに代らんとして諸々の群鶴正にしのごをけざる混沌たる文字通りの黎明以前です、何人によつて女優陣に

眞の黎明期がもたらされるか、大きな實に大きなそして何と光榮ある役割ではありませんか。

傳統を誇る歌舞伎にも女優陣への新しき認識は今や更に強められつゝある秋、所謂女形の領域にすら達し得ないなんて風辱さ、驟然として一蹴し得た時こそ初めて輝しい黎明が訪れた時でありしかもそれは最早ほど遠くないところにまで接つて來てゐると解釋して差支

## 阪東壽三郎の（一）

谷 健 一

新人の少ない關西劇界で最も將來性ある人と云へば矢張り阪東壽三郎を第一に推すべきでせう。一見ブツキラボーに過ぎる彼が今日をなしたのは實にあのブツキラボーから出づる重厚な力強い藝術に依つてゐる事は言を俟たないところだ。

第一劇場を生み、更新第一劇場

ないでせう。チャンスは誰がつかむか。

とかくの下馬評をもうかなり長い間耳だこの出来るほど聞いてゐる丈に、矢張り貴女に、其第一線の光榮を摘んで頂きたいものです。貴女の名題の名を恥しめぬ爲にも多大の期待を、絢爛豪華なあの大舞臺に於ける次第であります。切に御奮闘を祈ります。（一九三五、一〇、二七）

を爲し、鼎會を起した、その話は廻るが壽三郎が何故に第一劇場を解散したか。僕はこれが残念でないのです。尤も絶えず何かを爲さんとする壽三郎の努力は十分に買つてやる可きだが。あの石川薫とのコンビは今も尙好ましい印象として僕の頭に残つてゐる。精力的な壽三郎と精力的な石川の名

コンビ、其當時若いしかもインテリ階級に相當もてはやされた名コンビ。其處にはいつまでも因習にとらわれず新境地を開かんとする良心的な氣持がにじみ出てゐるではないか。随つて歌舞伎俳優であつて壽三郎の芝居はいつの場合でもその舞臺に接してフレッツシユな味はひを覺えるのは無理からぬことだ。

その第一劇場が崩壊して、再び名も更新第一劇場と改め、扇雀、霞仙それに元國民座の古川利隆、帝劇の河村菊江、エランウイターの面々を加へて意氣軒昂たるものが生れた。

その第一回作「嘆きの天使」エミール・ヤニングス主演の當時評判になつたドイツ映畫を森田信義氏が脚色したもの、野淵昶氏の演出で壽三郎のウインラート教授だ。ヤニングスの深さや複雑な味はひは無いが、彼の生一本と重厚さが無盡に働いて最初のものとし

ては充分の出來榮えを見せたものだつた。自分は態々大阪迄出向いてその熱演に感激したものである僕はこゝで新たに壽三郎なればこそその感を深くしたのであつた。そしてこの境地こそこの人の進むべき本來の途ではなからうかとまで思つた。

其後京都でも公演した。演劇の新らしい分野開拓を標榜して……併し、脚本の選擇に行き詰つたのは如何にせん。どうせこれ位の仕事をなさうと念すれば脱線覺悟一時的不入氣、不入覺悟で進まればならないのは常識的なことであるのだが……

何もし様とはしない、否なし得ない關西俳優の中で敢然たとへ不成功に終つとはた云へ野心的な動きを見せる壽三郎の今後こそ大いに期待してゐるものでせう。それから此度の福助、魁車に依る鼎會です。歌舞伎の臭みを抜かずして

歌舞伎では味はれない新作物の解釋に務めてゐる今の彼の仕事。

「涙の四つ辻」近頃での傑作でせう、三人の氣分がピッタリして思はず眼頭が熱くなるを覺えた、微弱乍らこのトリオも今後は、必ずや何かを爲し行くことと固く信じ

## 前進座の成長

川上利一郎

昭和六年六月、東京市村座で歌舞伎社會内の門閥制度や階級制度の因襲に猛然反抗の火の手をあげ猿之助の春秋座より分離して、歌舞伎俳優生活の内面を曝露した「歌舞伎王國」を上演旗擧げをした當時には、劇壇に大きなセンセーションを巻き起し、其の主張には多くの共鳴を得乍らも、其の永續性については誰よりも危惧の念をもつて注目されてゐたものである。當時この一黨のリーダーである河原崎長十郎にしても、中村翫

て居るものです。やゝもすれば寂れ勝な關西劇界にあつて藩三郎の存在こそ頼もしく力強きものでありませう。

藩三郎は動く……

彼の將來には目して待つ可き幾多の問題がかけられてゐる筈です

右衛門にしても、猿之助の様な人氣を持つ譯が無い。寧ろ無暴に等しいこの旗擧に「上演狂言の選定には全座員が協議決定し、師弟關係身分の差別等全廢して座員が平等の權利を持ち、藝術の爲に其の使命を完ふする」との聲明をして以來、財政的苦境や、劇場難で、幾度か血のにじむ困難と戦ひ、窮地に押し詰められ乍らも、よく團結して四年、遂に見事これを克服して、今日に至つた不屈不撓の努力には驚嘆の他はない。

關西では座員にとつて馴染の無い土地であり、初め寶塚や朝日會館の公演に、一部のファンの支持を得たに過ぎなかつたものが、昨年七月宿望なり浪花座に來演し、夏枯れを一襲して、華々しい道頓堀進出興行の成果を収めた。これ以來道頓堀へ來演する事、今回で五回に涉り、稍々沈滞の氣味ある關西劇壇に、清新の氣を吹込むものとして其の來演の日が待たれる様になり、現在ではガツチリと民衆と手を握り、相當根強い觀客層を獲得してしまつた。

南北の「龜山の仇討」お染の七役「忍び車のだんまり」等の古劇の復活や「忠臣蔵」等の様に古風な本格的演出に依る劇の再吟味、農村を扱つた「馬」等の野心篇、更に喜劇、新劇等あらゆる方面に縦横の活躍振りである。これらの撻まざる藝道の精進は次の數例を拾ふ事に依つても、如何にそれが眞剣であるかを如實に説明してゐる

今年の六月東京興行中、毎日樂屋入りの時間を一時間宛繰上げて、座員参加で規則正しい舞師の講習を開始し、この基本的訓練を二ヶ年計畫としたり、講談界の新人神田伯龍師を招いて長講を聞く等。又は興行の餘暇を利用して、映畫を撮影し、この方面の經驗を積むところのあつたのも、時代を自覺した賢明なものである。或は東京上演の各座を全座員打揃つて、研究の爲に見物に廻る時であれば、映畫觀賞もすると云ふ勉強振り。一途に劇團の向上發展を企圖しつつある覇氣は必ず其の實を結び、劇壇の一角に君臨する日の來る事を確信するものである。若さと努力劇團と云ふ意味で、圖らずも又競演の形になつた新國劇と一脈通ずるものがあるのは面白いが、前進座の強みは歌舞伎出であるだけに、其の領域の廣い事である。だがそれだけに深く其の研鑽を積む事は容易の業でない。このところ

座員の奮起を望むや切である。

こゝで特筆すべき事は、最近勸進帳「孤城の落月」「室町御所」等の大物を上演して、相當の成績を挙げた、其の度胸には敬服する吾人の前進座を信頼するものは即ちこの氣概にある。

一座の俳優では、河原崎長十郎の押し出しの立派さと聲堂の豊富な事、緑の太い大まかな味を持ち左團次に師事してゐただけに其の節を多分に持つてゐる。この一座の中心人物で、早くより梨園の急先鋒として知られた歌舞伎の新人である。中村翫右衛門は猿之助一座の時分より新劇方面に定評のある藝を持ち、この一座の重鎮である。又立廻りの研究家として其の鮮かなのにも魅力がある。長十郎の三十三歳、翫右衛門の三十四歳、これを見ても前進座の前途の洋々たるを首肯せる。河原崎太郎は二十六歳の立女形、もと猿之助門下にあつて大

部屋で市川笑也と言つた無名の俳優であつたのが、たま〜前進座の旗擧に依つて、其の豊富なる天分を發揮する好機會を得た新人である。その勝れた女形振りには、只驚嘆の他無く、書家を父に持つ全然素人上りの彼が、滴る様な色氣と、凄麗さを持ち、丁度梅幸の後

継者とまで思はせるものがある。だがまだ舞臺の品位に缺くる處があり、未成品の誹りは免れぬが、其れ丈に大物となり得る餘地がある譯であるから、どうか自重して技藝を勵んで貰ひたい。他に、二枚目三枚目の役處から老役女形と多能なところ此劇壇に脇役として無くてはならぬ中村鶴藏があり、又最近室町御所の足利義輝將軍を演じて素晴らしい好評だつた瀬川菊之亟の進境の目覚しいのも嬉しい。その他、坂東調右衛門、橋小三郎、助高屋高助等に、女優では山岸しづ江等多士儔々、此の劇團の力強さを裏書してゐる。

だが此際希望したいのは、「島娘」「東京音頭」「ロイド」の活動狂」等の凡そ意味の無い場當りものとは、斷然絶縁して、旗擧當時の緊張を終始失はず、演劇革正の高邁な理想の下に、一步づゝ力強く前進して欲しい事である。

特に脚本選定の重大さを認識してゐる前進座が、興行者の獨裁から遁れてその選擇の自由を獲得した以上、何を思つて、これらの無定見な營利本位の愚劇を上演する事のあるのはどうした事か。此の點大いに戒心して欲しいと思ふ。勝ちて驕らず、健全なる躍進の爲、全座員結束して一意精進せられん事を望み、その輝やかしい將來を刮目してゐたいと思ふ。

(九、一〇、二八)

次號は顔見世號  
乞ふ御期待を、

にめたの者讀方地

● ● ● ドイマロプ ● ● ●

すまし致ぎ次取お

【り限にのもたれさ載掲に誌本】

はみ込申  
宛者輯編

# 梅野井秀男

## とネクタイ

新谷誠水

梅野井クンが、この一月初めて大阪入りをする時、これから、ながい間の舞台の上で、自分のお婿さんになる役者、都築文男クンとは既に名古屋で知り合つてゐたが、山口俊雄クンに憧れる心を抱いてゐた。

新聲劇や、國精劇の二枚目として、かなり名の響いた山口クンが、どんなに端麗な和事師であらうかと、稽古場入りをして紹介される日を楽しみにしてゐた。

稽古場で紹介された山口クンと初のおいさつがあつて此人がこれからのお婿さんかと思ふと、女形らしい、はにかみが、若い娘さんの結婚の晩のころもちは、こんなのであらうかと思ふ程だつた。

じつと見る山口クンは、二枚目といふ想像を外れて、蓬髪にむさうさに洋服をつけた、どつちかといふとスポーツ

マンの様な近代性を持つ青年だつた。

梅野井も、即座にわたくしもこれから  
の新家庭は、このお婿さんの様に、朗  
かに明るくなければいけない……と思

ひながら、ジート、ネクタイの色合に  
お婿さんの好みを見出さうとした。

その翌日の稽古場、山口はさのふと同  
じネクタイのまゝ現れた、その翌日も  
そのあくる日も。

心齋橋筋を歩いてゐる梅野井は、去る  
雑貨店で、華美な、頗る高價なネクタイに  
吸ひよせられてゐた。わたしのお  
婿さんになつてくれる山口クンにこれ  
位のネクタイがさせたいと、即座にネ  
クタイをあがなふと、直ぐその店から  
某ヒイキよりとして山口の部屋へ届け  
させた。

心づくしのネクタイも山口にとつては  
ごくかんたんに、あゝいゝネクタイだ  
な……位のもので、鏡台の抽斗に投げ



込まれたまゝ、初日が開いても、中日が過ぎてても一向にその新しいネクタイをかけようとせず、いつまでも初対面の時のまゝのネクタイがかつてゐる。

關西新派初御目見得の興行は大成功で一ト月が過ぎた。

引つゞいて二月も打ちつゞける事になつて、幹部連の成功祝が催された。

平常の生活も、ほとんど女と變らないと、樂屋でも中性扱にしてゐた梅野井も、その席に現れて、乾盃する。ほどよくお酒が廻つてくると、梅野井の女

形らしい態度は、酒がすゝむに連れてうすらいで、段々と男性の持前が現れてくる。その酒豪ぶりは、小さな盃

が面倒とばかり、コップで瀧呑がはじまつて、一座の連中が驚いた。

この時なにかの都合で、山口クンがさした盃、梅野井は受取らうともしな

いで、

いきなり鐵拳が山口クンの頭上にポツカリ、

「ヤイ山口、俺れの心がわからねえかネクタイはどうしたのだ」こゝで山口

には、いつかのネクタイが、梅野井からの贈り物である事が判ると共に、女

形として、そのお婿さんへの心づくし、なる程舞台の夫婦にも、平常そう

した者があつてこそ、演技の上に眞實味が出るものと、深く感激をしたと共に、

「よく毆つてくれた、有難い感謝をする……」

翌日から、山口クンの胸には新しいネクタイが、さんぜんと光つてゐた。

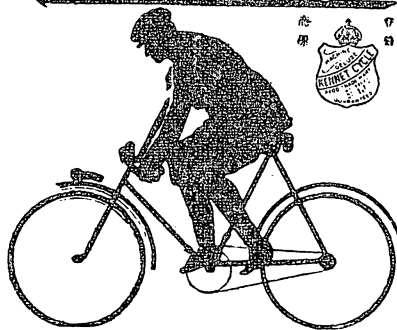
x

x

x

x

# ケンネツト号



萬人愛好の 携良車  
國産品中の完璧 是非御覽來々

市内特約店ニアリ  
株式会社 大澤商會  
京都市二條通十條西

◇ 僕 の 頁 ◇

村 上 勝

◆ 本誌も茲に九十八輯をおくり出す——創刊當時の事はいざ知ず、僕が、多少とも仕事をやるやうになつて、約五年である。編輯者も随分變つてゐる。京都へ行つてゐる松本さん、神戸に居られる大橋さん、歌舞伎座勤務の住田さん、田中滿彦さん——そして僕である。次號の顔見世號が九十九輯新年號で百號になる。何だか、こう萬歳を叫びたいのが、現在編輯に當つてゐる僕の氣持だ。

◆ 仁左ゆく——謹んで哀悼の意を表すと、共に食滿先生西尾氏に御執筆願ひ、特輯した。尙、今月は御病氣の坪内先生から玉稿を頂き、岡本先生も「鎌」に就いてお書き下さいました。御禮申上げます。

◆ 本誌を一號一輯出す毎に季節が變つてゆく——校正場で、うだつてゐたのが、何時の

間にか、爽やかな秋である。

◆ 宣傳部のニュースも今月はない。朗らかにヤスリをこすつてゐる。但し、僕は高田さんを長太郎と笑つた故か、僕自身が、長太郎になりつゝある。恐らく高田さんはこの後記を讀んで苦笑するであらう。

◆ 歌舞伎座屋上のスケート場が開かれて、風月堂のボテトがうまくなつた。ごうも胃腸病患者は喰べ物の話ばかりするデス。

◆ 家庭劇に關してデマが飛んだが、今月の新國劇打上げ後の中座へ九州巡演を了つて、出演する豫定である。家庭劇ファンのためにお知らせする。

◆ 次號は吉例の顔見世號である。發賣も、普通號よりは、早く、三十日頃の豫定です。

◆ 大橋孝一郎氏の紹介によつて、京都の新人葛原、谷、川上の三君が執筆され、今後とも聲援して下さいなつた。

昭和九年十一月一日發行  
月刊「道頓堀」第九八年  
雜誌「道頓堀」第九十八號

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。  
◆ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。  
◆ 御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告 取扱所 大阪電報通信社  
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘稅)

昭和九年十月廿八日 印刷  
昭和九年十一月一日 發行

大阪市南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)

松竹興業株式會社大阪支店

發行者 山 上 江 鏡 也

共同編輯 松 本 泰 三

印刷所 道頓堀社印刷部

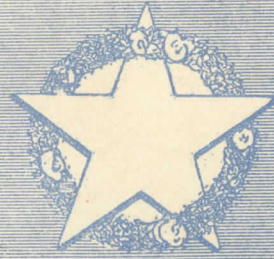
大阪市南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)

松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

道頓堀編輯部



スキナ  
スキナ  
スキナ  
あ  
む  
む  
む  
取紙

姉妹品

スキナ  
紙白粉

本冊元

朝日堂株式会社

大 販

本冊

中田 スキナ 屋

大 販

昭和二年十月廿五日  
 昭和九年十一月廿一日發行  
 第九十八號  
 第三種郵便物認可  
 (毎月發行一回)  
 第九年十一月號



固<sup>コ</sup>  
 形<sup>ケイ</sup>  
 浅田  
 飴<sup>アメ</sup>

アサダアメ

固形浅田飴は  
 旅行、遠足、観劇、講演會など  
 人混中に用ひて咽喉を保護し、  
 聲を良くし、呼吸器病を豫防す  
 る甘味芳香の良薬なり。

本舗 東京  
 堀内伊太郎



(全国各薬店にあり)

「道頓堀」第九十八輯 第九年十一月號

一部 金參拾錢